

『赤いおくりもの』

【第1章 ちいさなサプライクション】

都内の地下鉄、南北線——

「……はあ……はあ……」

……息が……、っ……苦しい……。」

おびただしい人混みに潰されながらも、

謙江は、今朝もかろうじての電車通勤をこなしていた。

ヤクザまがいの悪質クレーマー。

客にもスタッフにも気を遣う店長の職務。

現場を考慮しない上司からの指示。

……それらを一人で抱え込むのが、謙江の日常だった。

しかし、この日。20年ほども続けていた、その社会人としての日常が……

……ガラガラと音を立てて崩れていくのを、

謙江の心はハッキリと聴いたのだった……。

「こんなストレスばかりの、都会の中じゃ……」

……心も身体も休まりはしないのに……

もう限界……助けて……!!!

……お願い……しま……す、……様……!!」

……

2017年某月——

謙江は巢鴨の小さなマンションの一室で、ひっそりとある方と会話をしていた。その内容は20年間もの間……

……心の中でこだまし続けていた……

……魂の叫びとも言える訴えだった。

謙江はその20年の間。

社会的な地位を努力によって築いてきたのだが：

根本とも言える悩みはずっと未解決だった。

……いや、むしろ……

大きくなっていく責任と共に、

それは最早：解決不可能なほどに肥大化していたのであった。

2017年同月——

夫の仁は働きながら、牧師を目指して神学校に通い始めた。

……はずだったのだが、それから2年たったある日、

突然……まったく別の道を提示された。

なんと『マンガを描く』ことだった——

これは本人が一番驚いた。

「それ……ぜんぜん牧師と違うじゃないですか!!!」

……なんでマンガなんですか!!」

仁はとある方に食って掛かっていた。

絵が嫌いではないものの、今までの経緯を無視したかのような指示に憤りを感じて……執拗に捲し立てたのだが——

しかし何故か、その方の中では『マンガを描く』ことに決定しているらしく……

……どうにも仁は、それ以外の事が手につかなくなってしまうのだ。

「……ふう………僕はどうなっても知りませんよ？」

やるなら全力でやりますけど……必ず責任は取ってくださいね!!

その分の収入は一切無くなってしまうんですから………。」

この年、仁と謙江は豊島区の巣鴨から、

北区の志茂にある小さな古民家へと引っ越していた。

そして、謙江のあずかり知らぬ内に、このようなやり取りがひっそりと……

仁ととある方との間で行われていたのだった。

・
・
・

一方、謙江は解決できない悩みを抱えたまま、日々の重圧を若さの力だけで切り抜けていた。

しかし、2020年8月――

40歳を過ぎ身体の不調が増す中、

謙江はストレスと過労の限界に達してしまい、ついには……病で倒れてしまったのだった……。

医師の診断は……帯状疱疹。

謙江は背中 of 激しい激痛にうなされながら、2週間の自宅療養を余儀なくされてしまった。

・
・
・

「……はあ……。……仁君、ごめんね。

こんな事になっちゃって……

……痛っ……!!!」

「大丈夫!! 謙江さん!!

無理に動かないでいいから……。……！僕に任せて……。……ね？」

「ありがとう、仁君……。

……それじゃ、少しゆっくりさせてもらおうね……。……。」

「うん。……。……今はとにかくゆっくり休んで。

……。……でも、こんなになるまで……。

今まで……。……気づいてあげられなくてゴメン……。

ずっと謙江さん……。……頑張ってたのに……。……。」

「ううん……。……仁君だって頑張ってたじゃない。

……お互い様だよ。」

「でも、しばらく……ゆっくりさせてもらおうかな……

……思った以上に疲れちゃったみたい。」

仁が傍らで看病する中、

寝たきりの謙江はこれまでの……

……そして、これからの事を思いめぐらせていたのだった……。

「今まで、なるべく気づかないふりをしてきたけど……

……心も身体も、もう限界なのかな……

……この仕事を続けられるのは、もう長くないかもしれない。」

「……まだ身体が動く、今のうちに……早く次の手を打たないと……

……手遅れにならない内に……」。

思い立った謙江は、自宅療養の2週間を使って……

……とあるノートを書きだした。

——そう。『夢ノート』である。

この夢ノートには、

5年後の早期退職制度を用いて、今の仕事を計画的に退職すること。

自然が多く健康に暮らせる地方に移住すること。

自分に合った新しい仕事を得て、セカンドライフを築くこと。

……等の、これからの現実的な人生設計が記されていた。

一方、仁はこのノートの存在を知らなかったが……

謙江には、今の仕事を続ける事が困難なこと。

将来的により身体に合った地方へ移住すること。

……それらが二人に必要なことを……理解し始めていた。

この後、二人は力を合わせて、試練に立ち向かう事となるのだが、その航海が途方もない大海原となることを……

……二人の想像力では、まだ理解できていなかった……。

.....

謙江が床に伏し、先の見通しが立たない中でも：
.....仁は何故かマンガを描き続けていた。

現実的に考えるなら、今やるべき事は分かっていたが
それよりも優先すべき事があった。

このとき仁は、ある言葉によって動いていた。
それは預言書の一節で、たった今.....とある方から受けたものだ。

『なによりも優先してその方の心を行いなさい。
そうすれば.....それに加えて他のすべてが与えられるから.....』

それは現実だけを考えてと
至ってつじつまの合わない事だったが：
苦しい時に必ず与えられるその言葉を
第一に行動していくとき必ず結果が伴う事を：
.....仁は経験則で知っていた。

それが何故かはどうにも説明できないが：
結果が伴わなかったことが、ただの一度も無いことは事実だった。

だから今、仁はマンガを描き続けていた。
人は誰も一秒先すら何が起こるか分からないが：
その方は先のすべてを計算に入れて、その使命を与えているのだ。

だから、そんな不安な状況でも仁の心は揺らがなかった。
傍らにその方が居ることが、はっきりと感じられたからだだった.....。

.....

一方、仁があまり知らぬ内に書きあげられた、謙江の「夢ノート」には、今後5年間の移住計画が纏められていた。

しかし、実際にその移住計画を実行するためには、避けて通れない問題が幾つもあった。

例えば――

- ・ 遠方の移住先から親の介護が難しいこと。
 - ・ 50代かつ未経験の転職の難しさ。
 - ・ 地方の収入の少なさ。
- 等だ。他にも色々あるが：
現状の生活を続けていくことが難しいなら、移住した先に何の保証がなかったとしてもその一か八かに賭けるしかなかった。

謙江は幾つもの移住先を、頭の中でシミュレートしてみたが：「これだ！」というような候補地が見つかる事は無かった……………。

……………だがひよんな事から、突如として移住の候補地が決まった。それは仁に関連して浮上した場所だった…。

その候補地とは：

……………二人が生まれてこの方、まるで縁が無かった土地……………

――長野県だった。

ここで話は一旦、数年前に遡る……………。

・
・
・

仁は、牧師を目指すため神学校に通っていた。

毎日、順調に学びを続ける仁であったが……

謙江には一つ解決しなければいけない心配事があった。

………仁の、産みの母の事である。

その母は、仁が幼い時に居なくなってしまい……

既に、30年もの間……音信不通だった……。

生きているかどうか分からない。

でも、もし生きているのなら……。

——謙江はこのように考えていた——

これは仁が牧師になる前に、必ず解決しなければいけない事だ……！

謙江は度々、仁に聞いていた。

「もし今、お母さんと会えるとしたら……会ってみたいと思う？」

「うーん、どうだろう……

………分からない。

……第一、いま生きてるか分からないし……。」

かなり反応は消極的だった。

しかし謙江は仁の答えを聞いた後も、

密かにある計画を進めていた。

………仁の母の戸籍調査である。

それから数か月後——

謙江から仁に対する質問はこうだった……。

「仁の産みのお母さんに会ってきたんだけど……！」

「………ええ!! 何それ!! えっ??

………っというか………お母さん生きてたの??」

「……いやその前に!!」

「……謙江さん、一体どうやって探したの!!」

「えっと……」

仁君の実家の市役所から戸籍をたどって……」

謙江は仁に内緒でその母の現住所まで行って…

自身が仁の婚約者だと明かし——

その母が今でも仁に会いたいと願っていることを……

聞いてきたというのだ!!

(そして万一、母の答えが「No」ならば、

会ったことを仁に知らせないで終わりにしよう思っていた。)

……しかし答えは「Yes」。

ここまでは、謙江の思惑通りだった。

となると、後は仁の気持ちだけ……

けれども仁は、自分の気持ち云々より、

ここまでお膳立てしてくれた謙江の誠意に答えなかった。

そして30年ぶりの母子の和解は、

無事に成し遂げられたのだった——

今では産みの母と、それなりに仲良くできている…

……けれども今回、重要なのはそのエピソードではなく……

このとき調べた……戸籍の方だったのだ!!!

……ふたたび話は「夢ノート」まで戻る。

•
•
•
•

謙江が希望する移住候補地は、はるか海の彼方にある離島：
……だったのだが、将来の親の介護を考えて二の足を踏んでいた。

ならば自分の希望はひとまず置いて、
いつそ仁の身体に会う土地にしてみたらどうか？

……と考えてみた。そこで、以前調べていた仁の戸籍が役に立った。

仁の父方の先祖は、『長野県南佐久群八千穂村』という土地の出身だった。

実は、仁が母と再会した後、戸籍自体に興味をもった仁と謙江は、
旅行がてら（序に先祖の墓も探しに……）八千穂村へと行っていったのだ。

その旅行先の宿で、仁の体調がとても良かったことを……謙江は思い出したのだ。

私は八千穂にぜんぜん縁もゆかりも無いけど、
自然が豊かな所だったし移住候補地に入れてみようかな？

謙江はふとした好奇心から、八千穂の近くの物件を調べ始めた。

「家の相場がいくら位なのか、知っとくだけでも損じゃないもんね……」
カタカタカタ……ノートパソコンを打つ手が軽快に走る。

「ふー……中古の家だと大体これくらいなんだ……」
……東京とぜんぜん違うなあ……」

カタカタカタ……

「えっ？！庭がこんなに広くて200万円台？

……うそっ！ありえ……安っ！！」

カタカタカタカタ……

好奇心に伴い指はさらに加速していった。

「うっそ~~~~！！」
……うわぁ……！！……すっごーい！！」

謙江は移住の事をすっかり忘れて、ただの興味本位で物件を漁りまくっていた。

その日は日曜日。

仁と謙江は、居間で一緒にくつろいでいた。

休日はマンガの事を忘れられるので、仁はとても気分が良かった。

不意に謙江は、仁に声をかけた。

「…ねえ？この家どう思う？」

ログハウスなんだけど…可愛くない？」

仁はスマホいじっていた手を止めて、
ゆっくりとノートパソコンに目を向けた。

「ふーん、ログハウスなんだ…」

…っていうかログハウスって何だっけ？」

「丸太でできた家だよ。」

仁くん木とか自然とか好きでしょ？」

「そうそう…昔から木は好きだよ。」

…そういえばバームクーヘンも好きだし！」

謙江は、分かったような分からないような気分のまま、会話を進めた。

「そうだよね。だったらこの家どうかな…？」

なんか可愛くない!!…まあ、見た目だけなんだけどさ。」

このとき謙江は移住先の候補として見せた：

……というより、単にログハウスの見た目が可愛かったから、
面白半分に見せたただけだった……のだが。

仁はログハウスの写真を眺め、少し考えたような仕草をしたかと思うと…

真剣な顔をして答えた。

「うん…僕、ここなら住んでもいいな…」

値段も…まあ…大丈夫そう。」

「えっ…即答!!」

……っていうか、この家でいいの？ログハウスだよ!!」

仁の想定外過ぎる返事に、謙江はひどく驚いた。

すでに気楽な表情に戻っていた仁は、

素っとなん狂な質問を謙江に浴びせた。

「別に…いいんじゃない？」

……っていうか、この家どこにあるの？」

「長野県の小諸だよ〜〜!! この前行った八千穂の近くだよ!」
少しずっこけそうになったが、謙江は何とか堪えた。

「だったら環境も良さそうじゃん!! 見に行ってみようよ!」

「ええっ?! 本当に……!!」

じゃあ……内見の予約しちゃうよ?

………長野まで行くんだけど本当にいいの!!」

「まあ……どのみち仕事も変えるんだし……」

この際、環境が良い方がいいんじゃないかな?」

謙江は、まさか仁がそこまで食いついてくるとは思いもしなかったので、
いまだ半信半疑ながらも……その物件の内見を予約した……。

しかし何故この時……

即断で長野行きを決断できたのか?

そして、すでに転職する事は決定していたのか?

——それを説明するには、また時を少し遡る必要があった。

【第二章 憂目のタイダルウェイブ】

時を遡ること二か月、2020年11月――

コロナウイルスの第二波により、東京……もとい日本中がハチの巣を突いたような大騒ぎとなっていた。

謙江はようやく帯状疱疹が治り、仕事に復帰したしたのもつかの間……コロナウイルス対応のため、今まで以上に多忙な日々を送っていた。

「はあはあ……!!!!……人手がぜんぜん足りない……のに……

……対応した後、すぐ正反対の指示が……!!!!

……くっ……一体、どうしたら……!!!!」

店長として不測の事態に孤軍奮闘していた、謙江であったが……

……部下がコロナウイルスで倒れ……

……現場を無視した上司の指示に振り回され……

……ついに仕事量が……

一人の人間の限界を超えてしまった、謙江は……

その日、夜遅くまでの残業を終えて家に帰るやいなや……

……重度の疲労で倒れこんでしまったのだった……

家で謙江を迎えた仁は……必死に謙江を介抱し寝かしつけた……が、

……朝、仁が目覚めると……

……抑えられない感情が溢れてきて……

……溢れてきて……大泣きして……大泣きして……

子供のように泣きじゃくっている謙江がいた……

「ごめんなさい……ヒック……ごめんなさい……

……もう……無理です……!!!!

本当にごめんなさい……………!!!

もう…このまま…辞めさせてください!!!

謙江は抑えられない感情そのまま、上司に電話をかけていた。

上司は泣きじゃくる謙江に驚きつつも、
なだめるよう平静を保って言った。

「…とにかく、今日はそのまま休んでいいから…。」

お店の事は私が行って何とかする…。」

だから今日はそのまま寝ていなさい。」

「…それで、もし気分が落ち着いたら…。」

…早めに病院に行って、後で結果を電話してくれればいいから…。」

……………いいね？」

上司は理由を聞くことすらためらった。

泣いて泣いてまともに話ができない謙江を、

なだめるので精いっぱいだったからだ。

その日、急遽行くことになった心療内科の診断は統合失調症。

……………いわゆる適応障害だった。

ようやく仕事に復帰したのも、つかの間。

謙江は再び三週間の自宅療養となってしまったのだった…。」

一向に泣き止まない謙江を介抱したとき、仁は確信した。

「謙江さんが、この仕事を続けることは…。」

…絶対に、あの方の心ではない…!!!

…一刻も早く都会を離れて…。」

二人で新しい仕事を見つければ…!!!

……………しかし、このときの仁の思惑を他所に

謙江がすぐ仕事を辞める事は無かった。

三週間たって、少し気分が落ち着いた後…。」

——精神安定の薬を飲みながら——

謙江は無理しないよう心掛けつつ、仕事を続ける道を選んだ。

それはひとえに謙江が計画していた『夢ノート』の実現の為だった。

……しかし仁は、その謙江の判断に危うさを感じて……

……一刻も早い移住の実現を決意したのだった。

一方このとき、仁を取り巻く環境も変わりつつあった……

志茂（東京都北区）の古民家に引っ越して、二年。

この辺りの再開発で、どこもかしこも工事中。

しかも極めつけは……

——いつの間にかに建てられた——

家の目前にある巨大な電波塔（どこの携帯キャリア用）だ!!

……庭に出る度とにかく頭が痛いのだ。

加えて、強い電波を発信する家もずいぶん増えた

スマホで調べればすぐわかる……

おびただしい三本柱が画面上にひしめき合うからだ。

仕方なく仁は、家中に電磁波対策をしていた。

なぜなら仁の身体が電磁波を受け付けられない、電磁波過敏症だったからである。

巣鴨から引っ越した理由も、マンションの隣人が

昼夜、強力な電波を発するようになったからだ……

……ゆえに仁は、住んでいた古民家の壁という壁に、

防災用のアルミシートを仕込んだ。

一般に電磁波は光なので、アルミで反射すれば問題は無い……という訳だ。しかし、家の全てを被うのは至難の業だった。

特に、高い所にある電波塔の場合

天井のすべてを被わなければならないのだ……!

そして借家ゆえにDIY（家の改造）の限界は早く訪れた。

……つまり、実質お手上げ状態だったのだ。

さらに追い打ちをかけたのが政府の5G政策だ。

最新型のWi-Fiルーターというのは、

5G通信機能がデフォルトで仕込まれている（高速通信モードという）。

つまり、普通にWi-Fiを使うだけで…

……問答無用に5G電波を執拗に飛ばすのだ：！！

案の定、仁の身体は真っ先に5Gを受信してしまい：

……日本の政治がいかにも国民に寄り添っていないかを……

頭痛と心臓の苦しさにより実感するのであった……。

そびえ立つ電波塔を睨みつけて、仁はつぶやいた。

「こういうのを、テロって言うんだよ……」

なんで住んでる人の許可取らないんだ！まったく：！！！！

「……引越して来たときは、あんなに快適だと思っていたのに：

……はあ……。」

……そう。

この志茂の家はボツンと一軒家よろしく：

都内にも拘わらず、何故か周りに家が隣接していなかった。

加えて隣接している敷地の半分以上が広大なパーキングだった。

……つまり周辺の住居からのWi-Fiと距離を取れたのだ！！

……とは言えそれも今は昔。巨大な電波塔を前に、

住環境は悪化の一途をたどっていた……。

——ここまでの話を整理すると…

『謙江の体調と精神状態により、一刻も早い移住と転職が必要だった。』

『仁の電磁波過敏症により、Wi-Fiの多い都会を離れる必要があった。』

つまり端的に言って、

都会から『移住』して『転職』すること…

……この二点の迅速な解決が、二人には必要な状況だったのだ。

しかし、それだけでは……

仁が、例のログハウスの写真だけで『移住』を決断できた理由にはならない。

実はこのとき、仁にはもう一つの……優れた判断材料があったのだ。
それは我が家に伝わる、とある「伝説」だった……。

それを我が家では、『一件目伝説』——

……と、まことしやかに呼んでいた(笑)。

勿体ぶっても話が進まないのので簡潔に説明してしまおう。

我が家では引越しをする際、必ず一件目が最善の物件となる

……と言う原理法則が存在したのだ!!!

僕も説明する自信があまり無いが……

とにかく言える事は、『結果が必ず伴う』という事だ。

それが本当かどうかは、この後の話を見て判断して欲しい。

ただ今、一つだけ言えるとすれば——

これは偶然とかまぐれの類では決して無いという事だ。

僕にとって『祈り』とは、とある親切な方との会話なのだけでも……

僕は、何か重要な事を判断するとき、必ずそれを欠かさない。

……そうすると……

『しるし(奇跡の前触れ?)』が現われる……事がある。

僕の場合は、引越しの際に必ずこれを試す(小さいのは、毎日だけでも)。すると……僕に現れる『しるし』は……おおよそ『安心感』なのだ。

(『安心感』に加えて『ことば』の時もある。)

そして、もし……

これからその人に起こる事が…

——とある方の計画のとき——

……その『しるし』はさらに顕著に現れる。

その方は、『しるし』を

——もっとも分かりやすい所——

つまり、その人の目の前に置いてくださるのだ……。

……それが、僕にとって一件目の物件……という事になる。

……お分かりいただけただけであろうか？

これが、我が家に伝わる「一件目伝説」である……!! !!

巢鴨に引っ越した時も一件目……。

志茂に引っ越した時も一件目……。

そして、今回。長野に移住するときも……

過去をトレースするように一件目なのだ。

もちろん引っ越す際に、幾つか比較検討はする。

けれども、『しるし』が与えられた物件を超えるものは…

……どんなに探しても見つからないのだ……

結局、比較検討は徒労に終わるだけだった。

そして今回、実際に…

このログハウス選んだ事が——

間違いで無かった事がこの続きの話で明らかになるのだ!! !!

……これで準備は整った。

ようやく話は、長野のログハウスを内見しに旅立つ所へ進む……!! !!

【第三章 赤いおくりもの】

2021年1月コロナの影響で、がらんどうになった佐久平ホームに滑り込んだ謙江は、嬉しそうに第一声を発した。

「長野って、意外と近いんだね：!!」

仁は二つ返事で返した。

「新幹線がすごいんだよ：！大宮から、たった四十五分で着いちやうなんて。スマホの地図だと、結構あるのにね？」

北陸新幹線あさま609号を降り立った二人は、久しぶりの長野に興奮気味だった。今日はお昼の十一時半から、例のログハウスの内見があるためだ。

ホームに降り立つやいなや、謙江は声を上げた。

「うわあ〜：寒っ!!息が真っ白！仁君も手袋した方が良いよ：はい！」

「ありがとう：!!」

仁は、渡された手袋を受け取りつつも・何かに気をとられているようだった。目の先には、『桜』と『魚』の絵が大きく書かれた『ようこそ佐久平へ!!』という看板があった。

仁は、小首を傾げて呟いた。

「あれって、桜(さくら)と鯛(たい)で——さく『だい』ら——ってことかな？」

謙江は、間髪をいれずにツツコミを入れた、

「えっ：!!ぜんぜん違うよ〜!!」

「この名産は鯛(たい)じゃなくて、鯉(こい)！だから(駅名は)ぜんぜん関係無いでしよ!!」

仁は、思い出すように呟いた。

「あ：そっか。そういえば、前に来た時、鯉(こい)祭りやったもんね！」

——そう：あれは1年半前。仁の故郷である八千穂を散策—あわよくば先祖のお墓探し—をしたときの事だった。その時はGWだったので、今とは季節が真逆・・・つまり、冬の長野は二人にとって初体験だった。

仁は、まだ看板に謎が隠されているのでは・・・と、

名残惜しく何度か振り返りながらも、

ガタガタあばれる旅行鞆を手懐けて改札へと急いだ。

「そういうえば、レンタカーは駅前だっけ？」

改札を飛び出した謙江は、蓼科口の出口を指さした。

「うん。あっちの方！ 駅出てすぐの所だよ！」

「場所は平気だけど、久しぶりの運転：大丈夫かな？」

というのも、二人は二十年來のペーパードライバーだったからだ。

「ま、何とかなるでしょ：ゆっくり行けば。」

「運転も2日だけなら給油の心配もないし：ね？」

仁は、根拠の無い自信をもって答えた。

：言ったすぐ後で、レンタカーは満タンまで給油して返すことを知ることになるのだった
が：。兎にも角にも安全運転を心がけ、無事に目的地までたどり着くことができた。

見えてきたメルヘンチックな赤いログハウスの脇には、待ち合わせより大分早かったが：
すでに不動産屋らしき車が停めてあった――。

「へえ〜〜：これ相続の物件なんですか？」

仁は、案内されたログハウスの中を興味深そうに見渡した。

ラフな格好をした不動産屋の男性は、古ぼけた灯油ストーブに火を入れつつ答えた。

「そうなんですよ。ちよつと：寒くて、すいませんね。一応拭いてあるので、椅子：良かったら腰かけてください。」

その人は宮崎さんといって、およそ五十歳位の律儀そうな男性だった。地元の小さな不動産屋を経営しているらしく、とても手慣れた感じで二人を案内してくれた。

謙江は、分厚いダウンジャケットのまま、何かを避けるように：

恐る恐る古ぼけた長椅子に座った。

「そのストーブ：付いてるんですか？」

宮崎さんは、険しい表情でストーブを覗き込んでいた。

「いや〜：怪しいですね。5年ほど、使ってなかったみたいなので…。」
プスプスと音を立てるそれは、異臭を発しながら…黒い煙をあげていた。
それでも　ツララが無いのが不思議なほど寒い―　このリビングでは…
そのストーブにもすがりたい状況だったのだ…。

仁は窓の網戸に張り付いた黒いものを、恐る恐る指さした。

「これ…なんですか？すごく大きいんですけど…」

宮崎さんは、素っ気なく答えた。

「ああ、カマドウマですね。ここら辺に沢山いますよ。」

実は：一見可愛らしかったこのログハウスの中は、

――ギャップ萌えを狙ったわけでは無いだろうが――
たじろぐ要素には、まるで事欠かなかった。

天井も水回りも蜘蛛の巣だらけ：カマドウマだらけ。

どこを開けても、彼らは丁重に出迎えてくれる。

趣は閑静なれど：実に賑やかなカマドウマハウスとなっていた。

さらに、7年前の味噌や醤油など：

ヴィンテージ物の発酵食品が、戸棚へと大切に保管されていた。

さらに宮崎さんの案内が進むと：またもや、宜しくない発見があった。

なんと！押し入れがどこにも存在しないのだ…これには驚いた。

ログハウスというものは構造上、押入れが存在しないものらしい…。

「…う〜ん。引越すとき：家具どうしようか？」

仁は、さもお手上げ：といったように、謙江に手を広げてみせたものの、
実は内心：それすらも楽しかった。

宮崎さんは水平器を床に置いて、二人に言った。

「トイレから：お風呂の方に、床がちよっと沈んでいますね。」

二人は、水平器の目盛りを覗き込みながら尋ねた。

「なんで沈んでいるんですか？」

宮城さんは、水平器を手際よくポケットにしまいながら答えた。

「ここユニットバスなんですけど…実は後付けらしくて、基礎がユニットの重さに耐えきれずに沈んだみたいです。地下を見たら、後から、補修した形跡があったので…。」

「次は、二階に来てください。」

案内されるまま、二人は二階のロフトについて行くと、

「後は、ここがちよっと飛び出ています…。」

指で示された場所は、年月を経てしなつた床の木材がびよんと飛び出ていた。

仁は、ここでも困り顔をしてみせオーバーに腕を組んだ。

「ふうくむ…。これだけ古い建物じゃ、仕方ないですものね…。」

——終始このような感じで：

『冷凍カマウマハウス粗さがしゲーム』のようになってしまったが、

無事に(?)内見を終えた仁と謙江は、そのまま東京に帰ることをせず…軽井沢の宿で、今日の内見について検討をする事にした。

荷物を下ろして、ようやくベッドに腰かけた二人は、

顔を見合わせると：申し合わせたように、同時に言葉を発した。

「すっごく良かったね…!!あのログハウス！」

実は、二人が見ていたのは、

カマドウマとか、床が飛び出ていたり、収納が無い等…

宮崎さんが申し訳なさそうにしていた所ではなく、

変えようがない根幹の部分：つまり『木の状態』と家全体の『雰囲気』だ。

その点において、あのログハウスは十分すぎるほどだった。

もちろん：例の『一件目伝説』が、それを後押しをした事は言うまでもない。

そんなこんなで東京に帰っても、二人の意見はまったく変わらなかった。

「よし…!あのログハウス、買っちゃおう…!!」

…一見、ここまで順調に見える今回の内見だが、

とんとん拍子だったかと言うと…実は、まったくそんな事は無かった。

その状況を、少しだけ話させて欲しい…。

謙江が、このログハウスをインターネットで（偶然？）見つけたのは、この物件が相続のゴタゴタから解放され、ようやく日の目を見て、わずか一週間のときだった。しかし、実はこのとき：すでに内見の先客がいたのだ。

——しかも、二組も。

後で調べて分かったのだが、この辺りの別荘はあまり人気が無いため、買い手がつかない事が多い。実際、長野に来てみると：売地の立て札が、其処かしこに立っていた。不況と少子化の影響だろうか：別荘の不人気も致し方ない。しかし：にも関わらず、このログハウスには、先客が二組もいたのだ。

えっ?! なかなかの人気じゃないか!
：と、悠長に構えている訳にはいかない。
自分の番が来る前に脱落もあり得るからだ。

：……だが、そんな二人の心配を他所に、先客の二組は：
—— ついに、このログハウスを購入する事は無かった。

こうして三週間ほど、待たされた後：
ようやく先ほどの、内見の順番が回って来たのだ。

：……しかし、これでようやく：
欲しかったログハウスが手に入るのだ：!!
それは、とても嬉しい：嬉しい……が、
：……：こういうとき、誰でも一つ気になることがあるのではないだろうか？

そう：他でもない、
—— 『先客がキャンセルした理由』だ——

結局、誰にも買われる事が無かったこのログハウスは、
辺りに二束三文で売られている別荘のように：もはや価値の無いものなのか？
二人に少し：そんな思いがよぎったとしても不思議はない。

結論から言うと……
—— そんな事はまったく無かった！

……にもかかわらず、先客2組はこの家の購入を見送り…。
僕たち二人は、この家を購入した。

——違いの理由は、たった一つ——

先の二組は、『別荘』としてこれを求め…。
僕たちは、『移住する家』としてこれを求めた…
……というだけの事だ。

よく考えれば当たり前かもしれないけれど、
別荘としては高いが、住む家としてなら…実に破格だったのだ。

…となると、問題となる壁があるとすれば、
それは『お金』以上に『移住』にまつわる諸々のこと…
具体的には『仕事』や『家族』などの壁だった。

当然、この後の僕たちも…

——誰もが苦勞するこの壁に——
…当然、ぶつかるとは…
……はずだった、が……

なんと…!!見事に、
この壁を回避できていたのだ…!!
それも、実に『このログハウスを選んだ』というだけの事で…。
——正に、開いた口が塞がらないとはこのことだった。

そして、その秘密は…

——このログハウスの、絶妙なまでの立地にあった。

順を追って説明したい。

——まず『仕事』について——
謙江さんが働いている会社の支店は、長野に3店舗あったのだが…
このログハウスは、その3店舗のほぼ真ん中に位置していた！
つまり転勤の可能性が、およそ3倍になったと言っても過言ではない。

これで、移住の際の『仕事』は…首の皮一枚つながった。
…もちろん、それでも希望通りに移動命令がもらえるか…
全くの未知数なのだが…。

——次は、『家族』について——

謙江さんは数年後に、埼玉にいる母親の介護を控えていた。

しかし、東京からではコロナウイルスをうつす可能性が高く、
一度も通う事が出来ていなかった。

けれども感染者の少ない長野ならば…比較的、安心して母親の元に通うことができた。
そして距離が遠くなったにもかかわらず、北陸新幹線があるお陰で、
逆に30分も短く…わずか一時間で、埼玉の実家に通う事ができるのだ。

もし『夢ノート』に従って離島に移住していたら…

——このすべてを投げうっていたことだろう。

こういった経緯があつて、二人はあの赤いログハウスが、

——とある方からの贈り物であると確信できたのだった——

しかし、現実には『移住』をするためには…まだ越えなければいけない壁が存在した。
そしてそれは、仁と謙江の力だけでは、越える事ができないほど巨大な壁として…
…この後…二人の前に立ちはだかるのだった…。

「第4章 最後の壁」

満員電車の中、マスクで身を固めていた謙江は不意に咳き込んだ。

「ゴホッ!!——はあ、はあ……!!」

「……だめ、やっぱり息が苦しい——!!」

2021年3月、ログハウスの購入を決めてから、すでに二か月が経っていた。謙江は——心臓を鷲づかみにされた気分の中——今朝も、吉祥寺へ通勤していた。

——ヤクザまがいの客、とんちんかんな上司、

客とスタッフ両方に心をすり減らす毎日——

「どれもこれも……ぜんぜん何も……変わって無いし——ゴホゴホッ……!!」

「……はあ……。」

「やっと……欲しかったログハウス……」

買えたのになあ……ゴホッ!!」

ようやく念願のログハウスを手にしたものの、
実際の『移住』への目途は……未だ立っていないかった。

それもそのはず、謙江の肩書は未だに『吉祥寺の店長』だったからだ。

——転勤は自分の都合だけで、実現できる事ではない——

当たり前だが、謙江はそれを……二十年の長き会社勤めによって、
骨身にしみて理解していた。

故に、目下の生活は何も変わっていない。

……強いてあげるなら、ただ精神安定剤のかさが増えただけだった。

多めに処方された薬で思考がまとまらない中、謙江は虚ろな心で……
とある方と会話をしていた。

「——私、この先……どうなっちゃうんですか……？」

……一刻も早く、この生活……何とかしないと……」

私……どうにかなっちゃいますよ……」

このときの謙江は、

——このまま対策を施さないと生活を続けたならば——

およそ人格の崩壊を招く危険すらあった。
それほどまでに、仕事で精神的に追い詰められていたのだった。

仁も以前、十七年ほど心療内科に通った経験があった。
故に、うつ病やパニック障害に、ある程度の理解も寄り添いもできた。
しかし、それだけでは一時の気休めにしかならない事も、同時に理解していた。

この類の病を治すためには、生活環境を土台から変える位の根本的な治療が必要なのだ。しかもそれは、なるべく早急に手を打たないと手遅れになる。だましましの治療は、回復不可能なトラウマを生涯背負ってしまう事にもつながるのだ……。

「——もう…無理で……」

早く…長野へ…どうか——」

「——いつ?…:…教えて……」

…:…:…様——!!」

謙江のそれは、会話と言うより——燃え尽きかけたろうそくの煙のように——
もはや言葉にならず、ただの『うめき』となっていた……。

以前、紹介した「夢ノート」を覚えているだろうか？

この夢ノートには、あと5年で仕事を早期退職して——
暮らしやすく、身体に合った地方に移住をし、新しい仕事をもつ——

等の、これからの現実的な人生設計が記されていた。だが、最早その計画は現実的とは言えず、現状を踏まえた加筆修正が必要だった。

謙江の身体が、この先5年も今の仕事を続られない事は明々白々だ。ならば、転職を考えなければならぬのだが…。

経営幹部、事務職員、きのこ栽培…、
果ては、牛飼（カウガール？）まで。

長野でやりたい事、やれそうなことを天秤にかけながら、
試行錯誤して応募してみた転職活動は…

——見事にどれも不合格。
すべて書類選考で、落とされていたのだった。

五十歳が差し迫ってからの転職は、かくも難しいものなのだ。
現実はおよそ甘くない。

…とはいえ仁は調理師であるし、生活だけならそこかしこにある飲食店でも、
あまり問題はない。たとえ収入が減ったとて健康には代えがたい。
なにより謙江には、もはや一刻の猶予も無いのだ。

…であるなら、さっさと仕事を辞めてすべてをリセットし、長野へ移住すれば良いだけの話
だ。それこそ、このときもっとも現実的なことと二人には思えた。

そして、生活するために稼ぎ、食べて寝て…生き続ける限りそれを繰り返していく。そうい
った『ごく当たり前の生き方』を貫けば、移住は不可能では無いはずだ。
もちろん、そのごく当たり前が十分すぎるほどに大変なのが、人生なのだけれども…。

しかしこのとき、二人の想定する未来とは大きくかけ離れて…

——現実には、何故かそうならなかった。

そして、どうやら…

——も・っ・と・有・意・義・な・人・生・が・あ・る——
らしく、それを実現するために…

仁は、マンガを——

謙江は、今の仕事を——
どうにかこうにか、続ける事が必要らしいのだ。

この一見、現・実・的・で・な・い・選・択・肢…

何故、これが有意義な人生に繋がるのか…!!

…この物語の最後に、あなたにもきっと分かることだろう。

話が、少しそれてしまったが：再び物語へ戻ろう！

一刻も早く移住を進めたい仁と謙江だったが、その気持ちとは裏腹に：謙江の移住先の仕事はすべて書類選考で落選していた。

ゆえに、仕事を辞めてすぐ移住という決断ができなかったのである。

となると現状を打破するためには、仕事を変えずに移住：

つまり『転勤』ならば問題はない。

もちろん、転勤した先の職場の環境が必ずしも良いとは限らず、未知数ではあるのだが：現状での最善の一手は『転勤』に間違いなかった。

そう、二人が『移住』する為に、越えなければならぬ最後の巨大な壁。

——それは、『転勤の壁』だったのだ。

——『会社は個人にとって、ままたらないもの』——

謙江は、その会社に二十年務めた経験で：それを身に染みて知っていた。

希望する職場に配属されることは滅多になく、たまに家から三十分圏内の職場に配属され、喜んだのもつかの間：一、二年も経てばまた長距離通勤を余儀なくされる。

さらに、果ては北海道から九州まで：家族がいようが居まいが、お構いなしに全国どこでも転勤を余儀なくされる。それが当たり前の職場だった。

謙江は、いわゆる『全国転勤組』ではないため、辛うじて東京から離れる事は無かった。あまり出世はできないが、転勤は控えめ：そういった（手ごろな？）コースを選んでいた。それでも一時間半くらいの通勤は、日常茶飯事だった。

配属の希望は、年に一度。しかし、それも形骸化していると感じていた。

なぜなら、この二〇年間で希望が通ったことは、ただの一度も無かったからだ…。

しかも、今回の希望先は長野、

——そもそも管轄が違うのである。

どういう事か簡単に説明すると、関東一帯は『東京本部』が管理していて。謙江もその管轄の一人だ。

しかし、長野県は『愛知本部』という所の管轄なのだ。

例えるなら、フランチャイズ経営のマクドナルドのようなものだろうか。

背負っている名前が同じでも、店が違くと経営も人事も別…といった具合なのだ。

——当然、思い切った人事はできない。

先方に人手が必要なければ、申請した所で丁寧に断られるのは明らかだ。また東京とは異なり、地方は概ね『その土地の人』で構成される傾向があった。

そして、長野にも他県から来た人をすぐには信用しないという県民性があるのだ。

突然東京から来襲して来た、誰とも知れない謙江を、手放しで受け入れてもらえると思う方がむしろ不自然だろう。

…とはいえ、悪い事だけでもなく追い風もあった。

——家を買ったことだ。

この会社では、家を買ったときに、その近辺に配属を希望できる制度があった。あるにはあるが御多分に漏れず、必ず通るとは限らない上に、時期がいつになるかも分からない…。

二十二年間、一度も配属の希望が通ったことの無い謙江にとって、それはあまりにも頼りない命綱だった。

しかし、事は緊迫しているのだ！

他にすがるものがない謙江は、思い切ってその旨を上司に相談するのだった——。

その日の仕事が一段落した後、謙江は意を決して上司に電話をかけてみた。

「トウルルル…トウルルル…ピッ。」

あの…吉祥寺店の篠原ですけど。今、お電話大丈夫でしょうか…？」

「ああ…篠原君か。ちょっとだけ待ってくれ…」

…が…入った、じゃ…その…は、よろ…く…ガサ…ガササツ…

…もう大丈夫だ…何かね？」

電話を取った上司は、電話先でとても忙しそうだった。

謙江は、申し訳なさそうに口を開いた。

「あの…大変恐縮なのですけど、
異動の申請を…させてもらっても宜しいでしょうか…？」

突然の申し出に、上司は怪訝そうな声で答えた。

「ん?! 異動願いかね？」

一体、なんでこんな時期に!!

…まあ、申請自体は構わないが、

そういう申請は十一月だったと思うが——？」

上司に驚かれるのも無理はない。

そのときは既に年をまたいでいて、1月も終わり掛かった頃だったからだ。

謙江は、上司のその疑問を一言で解決した。

「あの…実は、家を購入したんです…。」

想定外の返答に、上司はあからさまに興味を示した。

「ああ…!!なるほど!!それはまた一大事だねえ…!!ふむふむ…。」

「…で、どこに家を買ったんだい？」

謙江は、あまりの調子の変わりように、返答を躊躇いそうになったが…思い直して秘密を打ち明けるように答えた。

「その…長野県です。」

その答えが、さらに想定外であったため、

上司は少し困った様子になって言った。

「え…!!東京じゃないの…!!」

…そこだと管轄が…

…う…う…

——君、思い切ったことをしたね？」

謙江が返答に困っていると…一転、すでに真剣な面持ちになった上司は話を続けた。

「それだと…(異動は)簡単じゃないよ？」

「はい…。でも、どうしても家族の事情があつて——。」

謙江は、仁が電磁波過敏症であることを告げた。そのために、もはや都会では暮らせない事も…。

——一番の理由は、謙江自身の心の病気だったが、それはこのとき伏せておいた…。

上司は、あまり聞き覚えの無い症例に：返す言葉を選んで答えた。

「：なるほど、それは大変だね：。」

「私も、できる限り力になりたいが：（長野は）こっちの管轄じゃないから、いつになるかは約束できない。：こういうのは、あまり前例のないことだからね。」

謙江は、想定通りの上司の対応にも関わらず、

それを受け止めきれない自分が居るのを感じていた…。

上司は、続けて言った。

「：良くて2、3年。最悪、5年後も覚悟して欲しい…。

それでもいいなら申請しておくが…：大丈夫かね？」

謙江は、心とは裏腹に物分かりよく返答をした。

「はい：仕方ないです。（長野への配属が）難しいのは承知してますので…。」

異動がすぐに通るとは思つてなかつた謙江だったが、それが実現するまで自身の身体がもつかどうか…：全くもって自信は無かつた。

——しかしこのとき、朗報は思いのほかすぐにやつて来た…：！！——
なんと！数日後、同じ上司から電話があつたのだ！！

「ああ：篠原君か？今、大丈夫かね？」

…あの例の件。いきなり長野は無理だが…

高崎ならギリギリこっちの管轄だから、

私の権限で、もしかしたら…：いけるかもしれない！！」

謙江は、突然の申し出に戸惑いつつ冷静に答えた。

「高崎…ですか？」

絶妙のアイディアに興奮気味の上司は、堰^{せき}を切ったように話を続けた。

「そうだ：!!群馬県の高崎だよ！」

あそこなら、新幹線で（長野から）ギリギリ通える圏内だろ？

：確かに大変ではあるけど、旦那さんが緊急なんだろ：？」

「は：はい!!そうなんです：！」

ありがとうございます！本当に助かります：。」

上司のこの機転により、諦めかけていた異動にわずかながら光が差した事を：謙江は、喜び勇んで仁に報告するのだった——。

「もうそろそろ：かな？」

仁は壁の時計をチラッと見て、その判断が正しいと分かると：少し伸びをした。

「ふうふう：よし!!終わりっ！」

あゝ!!今日も、ぜんぜん進まなかった！」

仁は言葉と裏腹に、軽やかに次の作業を進めた。

——そして、わずか十分とちよい後——

「よし！完成：っど。んん〜マンガも、これ位簡単なら良いのにな：。」

カウンターのの上には大小の皿に乗せられた

—— 鮭のムニエル、きのこのバターソテー、グリーンサラダ、炙った海苔——

：そして、艶やかに握られた『塩おむすび』が、所狭しと並べられていた。

その仁が、バトンを手渡したかのように：

間髪を入れず謙江は仕事から帰宅した。

「ガラガラッ：!!：ただいま〜：……」

仁は、ポットのスイッチを入れつつ、

その流れの美しさに思わず目を細めたが：

謙江の体調を思い出し、急いで玄関まで出迎えに行った。

「今日は、大丈夫だった：？」

謙江は、いつも通り疲れた様子だったが：意外にも、少し笑顔を見せた。

「仕事は、相変わらずだよ：でも、今日は良い事があったよ！」

仁は、それが何かは分からなかったが：久しぶりに少し元気な謙江にホッとした。

「そっか、それは良かった！」

先ずは入って、ご飯たべながらゆっくり聞くから：！」

着替えを終えて、短くお祈りをした謙江は：

今日の疲れを癒すように、黙々とご飯を食べ続けた…。

——一通り食べ、皿の空きスペースが増えてきた頃——
ようやく今日あったことを、仁に報告するのだった。

仁は、鮭の骨をとりわけけるのに苦戦しつつも、冷静に話を聞いていた。

「へえ：その上司、結構：良い人だったんだね？」

謙江は、ほおばったおむすびを、お茶で流し込んでから返事をした。

「うん：そうなんだよ！」

確かに最初は、現場とのズレがあって指示が大変だったけど…。

：人として信頼できる人だよ。」

謙江の減った湯飲みにお茶を注ぎつつ、仁は尋ねた。

「そっか。ホント良かった。」

：それにしても高崎かあ、どう？通えそう？」

謙江は注がれたお茶で、喉を潤しつつ答えた。

「：うーん。社内で新幹線通勤してる人、たまにいるけど…。

朝早くて、結構大変みたい…。」

「私も、もう若く無いし：同じことできるかなあ…。」

一瞬、視線を落とした謙江だったが：

仁の反応を待つことなく自ら結論を出した。

「でも：なんとか頑張ってみるよ！」

せっかく貰えたチャンスだしね。」

仁は、謙江の様子を見るや、少し考えるような仕草をすると：
——一瞬、何かを言いかけたが——

思いとどまって、そこであえて口を挟まずに、
矛先を変えて話を振ってみた。

「高崎って：たしか、妹さんが住んでたよね？」

謙江は、いまだ物足りなさそうに、サラダをつついていた。

「：うん。高崎は何度か行ったけど、あそこは長野と比べるとだいぶ都会かな…。
職場とか、お客さんとか：どうなんだろう？私は、もっと田舎がいいんだけどなあ…。」

仁は、少し探るように謙江に聞いてみた。

「直接、長野に行ける可能性はどう？ありそう？」

謙江の表情は、目に見えて曇った。

「：多分、駄目だとおもう。」

もし行けたとしても：2、3年後かも…。

：でも、その時まで：この仕事を続けてる自信はちょっと…。」

それは、ほんの一瞬の筈だったが、

時が止まったかと思うほどの間だった。

「：だから、高崎でも良いと思うよ。新幹線通勤くらい!!

都会でヤクザな客に難癖つけられるより100倍マシだから：!」

——それは、明らかなカラ元気だった。

謙江の中では、——不幸を両天秤にかけて——

少しでもマシな高崎に行くことが、決定しているようだった…。

仁は、頭の中にあるものをどうやって伝えるべきか：まだ迷っていた。

そこで、もう一度遠回しに尋ねてみた。

「でもさ：まだ、絶対無理って訳じゃないでしょ？」

もしかしたら：長野に異動できるかもしれないし！」

その可能性を謙江は一蹴した。

「そうなんだけど：前例が無いってさ。」

上司もそう言ったし…。私もそう思うし…。

うちの会社の管轄の話：この前、仁君にも説明したでしょ？」

仁は、謙江の考えが固執しているのを見て取り、思い切って頭の中にあることを伝えてみた。

「…でも、こういう先が見えない時って…」

実はもう、『結果がすでに用意されてたりする』じゃん？だから、どっちか決めないでさ…委ねて、お祈りしてみよ？」

謙江は、狭くなった思考が…少しでもだけ開けた気がした。

「あ…うん。それは、そうかも…」

確かにまだ、(高崎の) 内示が出たわけじゃないもんね…。」

このときは二人にも、この先…どういう結末になるかは全く分からなかった。

しかし、『結果がすでに用意されてた』ことは、これまで何度もあった。

例の、『一件目伝説』が代表的なものであるが、

小さなことはそれこそ毎週…いや毎日のように起こる。

それらはある意味、偶然とは正反対の出来事だ…。

なぜなら、法則によって必ず決まった結果に導かれるからだ。

その法則とは、いままでもこれからも変わらないもの…

——『とある方の言葉』である。

謙江との会話の途中、仁は、

——ある言葉をキャッチしていた——

それは、その言葉の一つ…

『その方は、良いもの(最善)しか、あなた方に与えない。』
という言葉だ。

人生のどのシーンで、どの言葉が与えられるか…

それは、仁にも謙江にも分からない。

しかし、人生のターニングポイントに差し掛かると必ず、

そのとき必要な『言葉』が、上から与えられる。

その日、この言葉を受け取った仁は、すでに不思議な確信を得ていた……だから高崎に行った後のあれこれを考えるより——まずは祈ろう——それが今の二人にできる最善だと、心の底から理解できた。

——それから約2か月経った、2021年3月20日。

二人は不動産契約をする為に、久しぶりの長野に降り立っていた。

加えて今日の大目標は、

——このところ執拗に続けていた、ログハウスの大掃除——
……ではなく、ログハウスに初めての全泊をすることだった。

さほど大した目標に思われないかもしれないが、

家具をすべて処分したもぬけの殻となった家に泊まるのは：

それなりの準備が必要なのだ。二人は思いつく限りの手はずを整え、今日を迎えていた。

二人は佐久平駅に降り立ち、堅苦しい契約を足早に片付けた後：

かすかな記憶とカンを頼りに、カーナビの道が僅かに届かない目的地を目指して……手探りをするように車を走らせて行った。

そして、最短とは言い難い難い道程をどうにかこうにか渡り次いで

……ようやくやくやく可愛らしい目的地へと辿り着いたのだった。

……

仁は様変わりしたりビングを見て、驚きの声をあげた。

「おおおっ：！！家具が全部片付いてるじゃんか！！

……あんなにいたカマドウマと一緒にっ！！」

あまりの変わり様に、自然とガッツポーズが出た。

謙江もそれを見て、思わず祈ってしまうほど喜んだ。

「ホント良かったホント良かった：！！

あれだけは絶対無理：!!カマドウマ最低っ!!」

その言葉に仁は呆れて、謙江の方を振り返った。

「え〜：そんなに!!：でも、もしこっち住んだらカマドウマくらい慣れないと：やっていけないかもよ？」

謙江は、首を横にブンブンした。

「いつかそうなるかも知れないけど：！」

今は無理!!自分：無理っ！」

そのとき仁は、小さな提案を思いついた。

「：そうだ。カワイイ名前で呼んだら：早く慣れるかもよ？
……………逆にして『うまカマ』とか？」

嫌悪感をむき出しにして、謙江は即答した。

「：チーカマみたいで嫌っ!!」

私、食べたくない!そんなの!!」

「大体、飛び跳ねる時点でもう無理!

……………アレ、飛びすぎでしょ!!」

仁は、何故か諦めず食い下がって彼の長所をアピールしてみた。

「：でも動きはゆっくりだよ？」

都会にいる黒いヤツと比べたら、

ずいぶんカワイイけどなあ…。」

「う〜う〜ん：…それじゃ、

『ポ〜ン』って飛ぶから

……………『うまポン』ってのは？」

謙江は困惑しながらも：少し善処を試みた。

「ちよ：ちよっとはカワイイけど…。」

……………う〜う〜ん：やっぱ無理!!飛んじゃダメ!」

渾身のなかよし作戦も不発に終わり、

仁はすぐく残念そうに、窓の外を見上げた…。

「……………可哀そうな『うまポン』。」

謙江はそれから逃げるように、奥へと進んで行った。

「その話やめよ：!!」

今日はやること一杯あるんだから：!!」

「……………あつ!!赤いテープ残ってるよ!」

仁もほぼ同じく、それに気づいた。

「ほんとだ!!冷蔵庫と洗濯機：あと青いカーテンも残ってる!
適当だったけど一応貼っというて良かったね!!」

：そう。その赤いテープは二度目にログハウスを訪れた日：

——契約の説明を受けて忙しい謙江を尻目に——
仁が思いつく限り貼りまくったものだった。

謙江は少しホッとして言った。

「古いけど色々と捨てなくて良かったね。

あ：でも、もしすぐ引越すなら：

逆に処分でお金かかっちゃうか……………」

それも想定の内：と言わんばかりに、仁は返した。

「いや：しばらくセカンドハウスとして使うし、

あった方が良いと思うよ?

しばらくどころか：もしかすると(移住は)ずっと先かも知れないし。」

その言葉に謙江は俯いてしまった。

「……………そうだよね：

高崎だって今年の異動で行けるか：

…まだ、ぜんぜん分かんないよね……………」

すぐ失敗に気づいた仁は、話題を変えようと

床を少し指で触ってみた。

「…見て!ホラ!!指が真っ黒：!!」

……………ハウスクリーニングって言っても結構雑なもんだね。」

「え!!…あ、ホントだ：。

……………それじゃ今日は：一緒にお掃除、頑張んなきゃね……………」

「：うん。そうだね！一緒に頑張ろう！」

「…………あれだけの『うまポン』が

片付けられただけで：まあ良しとしなきゃね♪」

そのキーワードに、謙江の眉間が少し険しくなったのはさておき、
：前向きにさせることは成功したようだった。

二人は先ず、座る場所だけ確保して、

お茶を飲みながら：この後の計画を立てることにした。

インスタントのお茶を淹れ、謙江はようやく一息つくことができた。

「ハア…………すっごく美味しい♪心の底からあったまるね〜」

——インスタントなのに、何故こんな味に：？——

仁は不思議に思いながら、カップの珈琲を凝視して首を傾げていた。

は少しまったりした後、ようやく謙江は口を開いた。

「この後：どうしよっか？」

至福の時を過ごせた仁は、得意げに答えた。

「ふふ：次やる事はもう決まってるんだ。

まずは全泊するために、寝室とリビングの掃除：

その後、お風呂（の掃除）だよ：！」

「うんうん：！……まずは寝泊りできるようにしなきゃね！！

掃除道具は一通り持ってきたから：

よ〜〜〜し！！片っ端からやつつけちゃうぞお！！」

インスタントが思いがけず美味しかったという

サプライズに気を良くした二人は：

——粉塵マスクとジャージに身を固め——

夢（移住の第一歩となる全泊）に向かって、
重労働をものともせず突き進むのだった：。

——陽もとつぷりと沈んだ頃——

目的を果たした二人は、至福のリラックスタ임을満喫していた。

お風呂から出るやいなや、謙江は大きく伸びをした。

「う〜くん!!…キモチよかったあああ〜!!ふああ〜!!」

「ねえねえ!!ココのお風呂、すっごい木の香りがしたよ!!ビックリしちゃった!!」

先にお風呂を上がっていた仁は、

その日、持ち込んだ『長コタツ』に収まってくつろいでいた。

「そうそう…：なんか癒されるよね〜」

「あとさ、何て言うのかな…？」

狭いはずなのに…：なんか広く感じなかった？

…：…アレ何だろう？」

謙江は、すぐピンときて言った。

「多分…：それって壁が木で出来てるからだよ！」

木だと圧迫感が無いから、そう思ったんじゃない？」

「私、温泉って結構行っただけ…：こういうの初めてだから
すごく新鮮〜♪」

温泉は『ご馳走を食べる所』と仁は認識していたので、
その意見を素直に受け入れた。

「なるほど〜…：そういうことかあ…。」

東京では桜が咲いていたにもかかわらず

…：長野の春は、吐く息が凍り付くほど寒かった。

謙江はコタツと一体化して叫んだ。

「は〜コレ無かったら

…：…私、もう死んじゃってるよ〜」

さらに冷え込む深夜に備えて、仁は

持ち込んだ灯油ストーブの位置を試行錯誤していた。

「こっち（灯油ストーブ）も必須だったね。灯油を運ぶのは大変だったけど…

本体は配送してもらえたしホント助かった…！」

「しかも、翌日に届くんだもんね？…：こんな山の中なのに。」

今どきの宅急便、恐るべしだよ!!」

それには謙江も激しくうなずいた。

「ホントだね!!…でも最初

郵便物とかぜんぜん無理なんじゃ…って思ってたよ?

…だって庭のポスト朽ち果ててるんだもん…。」

どうやってこんな山奥にすぐ届けられたのか…その日、謎が解ける事はなかったが…二人は仲良く首を傾げつつ、宅急便に感謝するのだった。

その後二人は、持ち込んだ最後の家具『電子レンジ』で、温かい晩ごはんを頂いた。お弁当は簡素だったが、これも得も言われぬ旨さだった。

食べ終わると二人は、ロフトの寝室へと足を運んだ。

クタクタになっていた二人は、すでに整えてあった羽根布団に滑るように潜りこんだ。

そして…ようやく、心からの安堵を得るのだった…。

…

…

…

「……………謙江さん…。」

「…まだ、起きてる……………?」

「……………うん…。」

「……………静かだね……………」

「……………だね……………」

…な…く…く…んにも聞こえないね……………」

「……………ひょっとして、もう夢の中だったり…?」

「……かも……。……。でも、まだその一歩目だけだね……。」

窓から街灯が見えない山小屋の上空には、
満天の星が広がっていた……。

動かすのをすっかり諦めた身体で：仁は尋ねた。

「謙江さん……大丈夫？」

平日からずつと働き詰めだけ……」

謙江の身体は疲れと副作用で……すでに限界に達していた。

「……はは……さすがに疲れたよ……。」

疲れたけど……楽しいよ。……身体動かすの。」

仁は、落ちそうになる臉をこらえながら言った。

「そう言ってくれると助かるけど」

……あまり無理しないでね……？」

謙江もすでに夢と現実がごっちゃになりながら答えた。

「……うん、ありがとう……。」

……でも正直、無理にでも身体動かしてないと……

頭おかしくなっちゃいそうだから……。」

実は謙江の服用している精神安定の薬は、日増しに増えていた。

そして当然、それにとまなう副作用も……。

仁はうつ病に長年苦しんだ経験上、謙江にもっとも効果的な治療法を知っていた。

それは対処療法ではない『薬』ではなく、生活している『環境を変える』ことだった。

……だからこそ二人は、一刻も早い移住を求めて必死になっていたのだ。

——しかし現状：二人に出来る事は、唯の一つも残されていなかった……——

ようやく足掛けとなる家は手に入れた……

しかし後は、ひたすら日常を耐えるしかなかった。

……そう。『転勤』とは、およそ他人で構成される会社都合が何よりも優先されるのだ。
謙江も長年の経験上……それを嫌と言うほど分かっていた。

だから現状……出来る事はひたすら待つ事だけ。

このときの二人は……：……：遭難者だった。

何時やも分からぬ救助を待つだけが……：……：唯一の救いだっただ。

心と身体があげる悲鳴を薬によって……

……：……：なるべく聞かないようにしながら……。

——このとき客観的な状況は、どう見ても絶望的に見えたが——

実のところ……：……：二人の心はそうでは無かった。

むしろ逆に、心地良い安堵感に包まれてさえたのだ……。

それは『人間の経験則』という曖昧なものよりも、
もつと確かなものに支えられていたからだだった。

『その方に繋がっている者は……：……（望んでいるものの）確信が先に与えられ……
後になって……：……それを手にすることが出来る……。』

二人はその夜……：……上から与えられたその言葉を握りしめて

——耐え切れないほどの苦しみの最中であつて——

幸せな眠りに着くことができたのだ……。

その夜、赤く可愛らしいログハウスの中で……

——実に、三人分の魂が——

決して離れることなく、しっかりと寄り添っていたのだ……。

一方その頃、東京には新たな脅威が……

闇にうごめくさざ波の如く忍び寄っていた——。

【第5章 向こう側にあるもの】

2021年4月——

東京に帰った謙江を待ち構えていたのは、日ごとに増し加わる、山のような残業だった……。

実に、コロナウイルスの影響により——
営業時間は短縮、窓口に来るお客は減少、業務は電話対応に専念……と、むしろ楽になる材料が多いにも関わらず：現場の作業は増えていた。

…その理由は、会社が推し進めていた事業計画を、このとき大幅に方向転換せざるを得なくなったためだ。

経緯はこうだ——

昨年度、大幅に業績を上げようとテコ入れして、まるで雨後の筍の如く、首都圏に店舗を増やした直後……

——それをあざ笑うかのように、コロナウイルスが都心を直撃——
息吹いたばかりの筍——もとい店舗ごと、以前より縮小する……という憂き目に遭ったためだ。

加えて、事業計画のもう一つの柱であった、窓口自動化のための新オンラインシステムを導入するも……
現状、手作業より手間のかかる問題児となっていたのだ。

それらの影響を多大に受けて：謙江の勤める吉祥寺店は、五月末をもって閉鎖。
謙江は通常業務に加えて、店舗の撤収作業と新システムの学習という、更なる重荷を背負わされていたのだ……。

……

その日、仕事から帰宅した謙江は、憂さを晴らすようにおかきを口に割り入れていた。

「バリツバリツ……!!……もぐもぐ……ふう……。

……っていう事があってさ……

会社全体が大騒ぎなんだよ……!!

はあ……。…どうなるんだろう……。これから…。」

仁は晩ごはんの食器を丁寧に片付けながら、お茶を注いであげた。

「トポポポ……。…いや、ホント大変だね…。」

「…それって：謙江さんより先に、会社が倒れちゃうんじゃない？」

謙江はお茶でインターバルを取りつつ、次のターゲットを厳選していた。

「うーうーん：まだ、そこまででは無いと思うけど……。…」

仁は手前にあっただ、どら焼きの包みを手に取った。

「…確かさ、クレジットカード会社ってA I（エーアイ）が得意な業種だって言うし…。」

「これから先、どうなんだろうね…？」

謙江は厳選することを諦めて、おかきを袋ごと手元に引き寄せた。

「…でもさ、クレジットカード自体はこれからの時代に必要なんだよ…？」

「…だから業界は残ると思うし：しばらくは大丈夫じゃない？」

まあ、先は分かんないけどさ…。」

仁は手に取ったものを一旦置き：

謙江の聞き役を努めることにした。

「……窓口（業務）が減るのは確かかもね…。」

実際：今、その転換期で現場は大忙しだし…。」

「…加えて撤収準備でしょ？」

ハア……。私は引越し屋さんじゃないっての…：全く…。」

謙江は通常業務を終えた後も、なけなしの体力で店舗の撤収準備を進めていた。

—— 店長はどんなに体調が悪かろうと、スタッフより先には帰れない——
撤収作業を張り切るスタッフを尻目に—— のりえの心は虚ろだった…。

仁は今までの話を整理して、

今：謙江に一番必要な事を提案してみた。

「よし!! それじゃ：土日は何もしないでゆっくり休もうか…!!」

「……：長野に行くのはちょっと控えてさ。……：どうかな？」

謙江はストレスのせいで、山となったおかきの袋に後悔しつつ…
疲れた顔で頷いた。

「……うん、そうする……。」

その夜、仁は布団を整えながら話を続けた——

「……ともかく、(閉店するので) これで異動はすることは確定したね。」

謙江はゆっくりとした動きで、モゾモゾと寝巻に着替えていた。

「……うん。でも、また東京かもしれないけどね……」

あるいは高崎かも……。」

謙江は典型的なりアリストだった。

故に、——一番ありそうな可能性から——話を切り出す傾向があった。
けれどもこの時：そう語る謙江の顔に、あまり不安の色は無かった。

一方、一般にロマンティストに分類される仁は、

——一番ありえなさそうな可能性から——物事を構築してみる傾向があった。
ただし、大方のそれと決定的に異なる所が一点ある。

肝心な所において大抵は：それがただのロマンで終わらない点だ。

……そう、仁は今まで何度も約束の手にしていた……

……それを手に入れるずと前からの約束にもかかわらず……

この時の仁は、

——いわゆる『見えない道の案内』だった。——

「ふふっ……でも、もしかしたら……も……あるじゃん？」

謙江は、そんな仁に案内される道が……とても楽しかった。

「……そうだね……。もしかしたら……も、ね？」

そう言いあっていた二人は、むしろ……

その可能性に不思議な期待があった。

すでに布団に入っていた二人は川の字に並んで、

真っ暗な天井を見つめていた。

仁は優しく安心させるように、謙江の手を握っていた。

「どのみち決戦は今週末…。木曜日…。」

「…きつと、一番良い結果になるよ…。」

「うん…。なんか：そんな気がする…。：何でだろうね？」

謙江は、手を仁に委ねると：なぜか不思議な安心感を覚えた。

仁は不安を微塵も出さず、暗闇の中で少し微笑んでいた。

「今までも、そうだったからだよ…：ふふつ。」

「ふふつ…：だね…!!」

謙江も、つられて笑った。

決戦を週末に控えた二人は、東京に居ながら…
長野に全泊した『あの日』と同じ、

—— 命の根源に触れるような、暖かい感覚を——
一緒に共有していたのだった…：…。

…
…
…

『それじゃ…行ってくるね…!』

「うん！行つてらっ…：あつ！スマホ持った…？」

『え？…あ、大丈夫!!ちゃんともってた。ほら!』

「ふふつ…：じゃ大丈夫だね。」

「…：…良い知らせ…：待ってるからね。」

『うん!!分かったらすぐ知らせるよ…!!』

「…：…じゃ、行ってくるね!!』

戦いに向かって勇ましく出発する、謙江。

それを笑顔で励まし見送る、仁。

この日の二人は、まるで朝の受験生の見送りそのものだった。

2021年4月27日、木曜日。朝から抜けるような青空のもと、二人は決戦——異動の内示日——を迎えていた。だが二人とも、もはや足掻くような気持ちでは無かった。

はるか昔…二人が大学受験をした時もこんな気持ちだったろうか…。いや、あのときはたしか…不安と緊張でそれどころでは無かったはずだ。

…というのも当時、謙江は教えきれないほどの合格祈願を机に並べたて、周りの受験生を威圧した過去を持っていた…。

……思い出すのも恥ずかしい黒歴史だが、それほどまでに何かを頼つても、不安は一向に拭えなかったのだ…。

しかし今、同じような…いや、それ以上の人生の岐路に立つても…昔のような不安に揺さぶられることは少ない。

それは、二人が大人になったから……では無く。手ごたえのある確かなものに出逢ったからだ。

二人共、今も昔も努力はしているつもりだ。……しかし、それだけで長い人生を走り切れるほど、甘いものでは無いことを…幾度となく訪れた挫折と、大きな心の病気から繰り返し学んだ。

たったそれだけの事を学ぶ為に…

長い年月と心の傷という…とてつもなく大きな代償を支払ったが…そのたった一つを学んだ事で…

——失われた代償以上に……今、大きく報われているのだ。

そこから得たものは——

言うなれば『生き方』そのもの、だった。

あのおときから20年。

自分の力だけを頼りとする生き方で、大きく失敗した二人は……今や、それより遥かに『大きな力』を与える存在に守られ——

あのとき目指していた……いや。想像すらできなかった幸せを……
数えきれないほど与えられていたのだった。

ほんの一例をあげるなら――

昔から二人共、恋愛がとても苦手だった……
なぜなら、どう努力しても一向に結果が伴わなかったからだ。

しかし、二人に寄り添う存在は：

世の中に見捨てられた二人を絶妙に結び付ける事で……
数多くの幸せを与えながら『大きな力』へと育てていく事を厭わなかったのだ……。

そして今では、お互いが無くてはならない存在となり、
支えあう事で実力以上の大きな力を発揮できることを知っている。

(ここを詳しく書くと、紙面が倍必要なので割愛するが……)

実にこの時、二人が出逢うには最も相応しくない……

――仁がうつ病のどん底で職を失った時に――
それは起こった……とだけ、付け加えておこう。

そんな出遭いすらも、『大きな力』へと変えるには

――正に、奇跡ともいうべきものが必要なのだ。

しかし、その幸せも……今日の結果によっては、
大きく覆ってしまう可能性があった。

今日は二人にとって……正に、人生の分水嶺だった。

……とはいえ、できる事は何もなかった。
なぜなら、既に異動の人事は決定している筈で、
その結果が、まだ二人の耳に入っていないだけの事だ。

こういった時…すでに決定していることについてあれこれ悩む習慣を、仁は持ち合わせていなかった。

だからこのとき、仁がしたのは…

「(今日も最善の結果を) ありがとうございます。」

——ただ、感謝することだった。

…なぜ、まだ起きてもない事に感謝するのか…

それは、数日前の夜…

長野で全泊したあの日と同じ言葉が、二人に再び与えられていたからだった。

『その方に繋がっている者は…(望んでいるものの) 確信が先に与えられ…後になって…それを手にすることが出来る…』

およそ必ず実現される、この『約束の言葉』は一番効果的なタイミングで、この上ない愛情と共に二人へと届けられていたのだ。

『真冬の最中に捨てられ 寒さと絶望で震える子犬を

そっと抱きしめ あたたかい住まいとミルクを与える

新しい主(あるじ)のように——』

同じ『約束の言葉』が、二度も与えられたのだから…

もはや仁の心に不安は無かった。

それは恐らく、それを一緒に受けた謙江も同じ気持ちだろう…。

…だが、逸る気持ちは否めない。

だからこういう時、なるべく心がけていることがある。

………………努めていつも通り過ごす事だ。

このとき仁は、内示の連絡が始まる午前10時まで、いつもどおり時を過ごすことにした。順番に連絡は回ってくるのだから、遅くなったらお昼を回るということもあり得る。

もちろん異動が無ければ連絡はないが…
通う店舗を失うことになった謙江には、無縁の選択肢だった。

…そう心がけたものの…いつも通りって意識すると中々に難しい…と、
いつもの自分に感心しつつ、若干ハイペースに家事をこなしていった。

だが…その作戦(?)を裏切るように、
10時を数分回った頃、思ったより早くアクションがあった。

「……ピコン！」

LINEの着信だ。

急げ急げ…!!

……はやる気持ちでLINEを起動しようと、
指をジタバタさせる仁であったが…

……その目的を達成するより先に、指の動きが止まっていた……

「……あっ!!」

LINEを開くまでもなく、

通知のヘッドラインで結果は分かった……。

そこには、短く一行…

「つぎは佐久平店長だよ！やった！」

「……あっ……ああっ……!!」

「……ああああああああああ!!!!!!」

仁は、次々と溢れてくる感情を言葉にできず……

とてもとても数多くのLINEスタンプを送信し続けた：！！

10……いや20以上は送っただろうか……：

勢いで送ったため、誤スタンプも数多く含まれていたと思うが……

……それもこれも言葉で言い表せない気持ちからだった。

……そして、粗方送り尽くした後、ようやく……

落ち着いて、短く喜びのメッセージを添えることが出来た。

「すごい凄い凄い……やった……！！

おめでとう！！ホント……良かった！！！！！！」

仁はスマホの画面を閉じ、溢れてくるものを堪えようと……窓の外を見上げた。

そこにあつたもの……それは、抜けるようにどこまでも青い空だった。

天は、初めから二人に結果を示していたのだ……

朝からずっと変わらず、二人を祝福するように晴れ上がった青い空によって……。

窓は今だ、そこかしこがアルミシートに覆われてはいたが、

それも最早気にならなかった。

………すべては、終わったことだ。

これまで……出口が存在しない迷路のような、移住計画だったが……。

今、目の前にハッキリとそれが現われたのを仁は感じて……

……改めて深く感謝の祈りをささげたのだった………。

・
・
・
・
・

「かんぱ〜〜〜い〜い〜!!!!」

『おめでと〜〜〜!!!!』

「うんうん…ホント、ありがと〜〜!!」

(※ただの炭酸水、レモン味。)

謙江は早めに仕事を切り上げ、

駅ビルで買い漁ったご馳走を両手に抱え、

脱兎のごとく帰宅していた。

今だアルミシートに包まれてはいたが：

二人の住まいは、今や盛大なお祭り会場と化していた。

今年一番の…いや、人生で一番とも言える試練を無事に乗り越えた謙江は…
もはや脱力しきったタコになっていた。

「はあ〜〜〜!!」

「……やっぱり、いつもいつも…」

一番（良いもの）しか、与えないよね…!!

……主ってさ…!!グビグビ…ぷつはあ〜!!

あ〜〜美味しい〜!!」

一緒に乗り越えた解放感で、仁も食欲が無限大になっていた。

「ほんとほんと…!!あ〜〜このピザやばい!!うまい!!」

こっちの変な色のサラダも…この何だか分からないお肉も…!!

あ〜〜!!今日は何食べても最高…!!」

「だね!も〜〜どれもこれも最高…!!」

謙江も負けじと…ひしめくご馳走すべてに箸をつけようとしていた。」

「……あ!」

一瞬、謙江は真面目な表情をしたかと思うと、

箸を下手なタクトのようにブンブンと振って、

仁を呼び寄せた。

「そうそう!!仁君、聞いてよ…!!」

「…ん?」

仁は頬張った口のまま、謙江を見た。

「今日の内示……」

ホントに最高だったんだから……!!」

「いや……知ってるよ……」。

だからパーティーしてるんじゃない……?」

「……そうじゃなくて……!!」

内示の時の……上司の驚き方が……

……それはもう!最高だったのよ……!!」

食べもの以外のつまみも欲しくなった仁は、その誘いに乗ってみた。

「へえ……:どんなの?それ!!……教えて教えて!!」

「ん……:……:たしかこんな感じ!!」

謙江は、モードを切り替えて……:少し目つきを厳しくしたかと思うと、
壮年の男性に似せた声色で語りだした。

『ん……:……:長年、多くの人を見て来たが……:」

こんな事は初めてだ……:!!

こんな短期間に管轄を跨いで……:いや、驚いた。

……:これも、例の閉店ラッシュの影響か……: (ボソツ)。

あ……:いや、何でもない。……:別に気にしないでくれ。』

『……:うむ!いやはや、兎に角……:おめでどう!!

……:もはや奇跡と言うしかないな……:これは。

篠原君……:!!おめでどう!本当に良かった……:!!』

すると今度は可愛らしくこつちを見て……:

いつもの謙江をアピールした。

「……:……:だつてさ!!ふふっ……:」

それを目に焼き付けると……:

仁はまぶたを閉じ腕を組んで深く頷いた。

「うんうんうんうん……:そりゃ驚くよね。

……:普通、無いから……:……:こんなミラクル!!」

そして、顎に手を当てまっすぐ謙江を見て笑った。

「……:主を知らなきゃ……:……:ね?」

「ふふっ…だよねえくく!!」

謙江もむじやきな笑顔でそれに答えた。

二人が、一通りのご馳走を制覇した後、

…謙江は遠くを見て呟いた。

「でもさあ…あのとき、私。」

…こんな早く移住が実現するなんて、思いもしなかったな…。」

仁は同意するように…黙って、その謙江を見つめていた。

唐突と謙江は続けた…。

「…だって、あのノートとぜんぜん違うんだもん…。」

アレ…あのときは完璧だと思ってたのになあ…」

…はあ…。」

からかうように仁は、はにかんでみた。

「ふふっ…でも、

…それ以上だったでしょ…?」

謙江は突如、真剣な顔になって…すぐにそれを否定した。

「以上どころか…最高だよ!!」

仁はその訴えを、笑顔で受け止めると、

翻って遠くを見つめた。

「…ふう…」

…ホントだよね…。」

謙江も遠くを見つめながら、お互い想いを分かち合った。

…そして、しばらくの後…謙江は少しうつむいて呟いた。

「…でも、もし異動がなかったら…」

(年内で会社を)辞めちゃってたかもしれないね…。」

「……………」

その結末を想像して、二人は押し黙ってしまった……。

今回、その未来は十分に現実的だった。
そして二人は、自分たちがその成否になんら寄与していない事を振り返って……
改めて自らの無力さを感じたのだった……。

二人は語る事を控え……

……これまでの長く険しい……

……そして、不思議だった旅路に……思いを馳せた。

「本当……よく、ここまで来れたね……。」

「……………うん……ホントにね……………」

今回、仮に異動がなかったとすると……

次回、そのチャンスに巡り合うまで、どれほどの期間、忍耐が必要か……
それは全くの未知数だった。

……そのような、人生の『希望』が見えない状態が長く続くととき、

人の心は病んでいく。そして、もしそれが長引くなら

……決して取り返しのつかない事態になることを……

仁は、自身のうつ病の経験から学んでいた。

しかし今回……そのような苦しみの期間はごく短かった。

……ただの結果論として、そう言っているわけでは無い。

なぜなら、あらかじめ教えてもらっていたからだ……

——その道が開ける未来が必ず来ることを……だ。

それによって、二人は必要以上に

心が負担を受けるのを回避できていた。

——なぜ先の事が分かるのか？——

…それは、ここまでの話でおよそ分かって頂けたかもしれないが、『主』がそれを教えてくれるからだ。

——適切な『ことば』を、心の中に示すことによつて…。

このように、『主』はその人に…

あらかじめ先の事を教える事で、自身が神であることを証明する。

……そんな、ギブアンドテイクが、この関係には…ある。

……さらに言うなら…

『主』は、その人との『関係性』の質と大きさによつて、大きな力を発揮してくださる。

……その行き着く先は、『主』との親子関係なのだが——

もし創造『主』が親となってくれた暁には、

……この物語の登場人物と同じように…

家族の絆とも言える強い守りを、『主』から幾たびも受けることになる…。

「……ねえ…」

「……まだ……起きてる？」

「……ん？…起きてるよ…。……どうしたの？」

明かりを消した部屋で、二人はすでに布団に包まれていた。

「なんか、ワクワクして……寝れなくて…」

「……夢の中に居るみたい、なんだもん。」

「……ふわふわくっついて…」。

「ふふっ……何それ？……でも、なんか分かる…」

僕もそんな感じ、だから…」。

「ねえ……？……ほっぺた……ツネって良い？」

「えっ……!?何で？……自分のツネればいいじゃんか……。」

「……だって僕、もう何回もやってみたよ……それ。」

「……ふふっ、そうなんだ。」

……じゃ、私も………いたっ。」

「………やっぱり、夢じゃなさそう……。」

「………夢の中の人は、そんな事しないって………多分。」

「………そうかも………ふふっ。」

「………ねえ？……まだ、起きてる……？」

「………起きてるけど……なに？」

「………私たち……最後まで、守られてたよね……。」

「………うん……。」

……いま、ここで……こうやってることが……証拠………かな。」

「………だね……。」

「………うん……。」

真っ暗な天井を眺めつつも……仁のその目は、天井の先を覗いていた。

「………ホントに……『主』と出会えて良かった……。」

「一番の成功かな……僕の人生で、これが……。」

「………それなら、私もだよ……。」

隣に川の字になっていた謙江も……。……同じく真っ暗な天井の先を見ながら呟いた。

「だって……、」

『主』と出会うまで………ホン………トに悲惨だったもん……!!」

「ふふっ……、不幸自慢なら負けないよ……?」
仁は笑って、その勝負を受けてたった。

「むくくく……、私だって……ちっちゃい時から含めたら、結構いい勝負するよ……!!」

謙江は幼い時からの記憶を総動員して、布団の中でもがいていた。

仁はからかうように……はにかんでみた。

「ふふっ……でも、いま幸せでしょ……?」

謙江は暗闇の中……突如、また真剣な顔になって……すぐそれを否定した。

「幸せどころか……それ以上だよ!!!」

仁は暗闇の中、見えない笑顔でそれを受け止めると……すぐ真剣な面持ちになって言った。

「……ふう……、

……ホント、凄いやね……『主』ってさ。」

……その夜、仁と謙江は心に広がる暖かいものを、かかってないほど身近に感じ取ることができた……。

……そして二人が眠りに着くまで……

……経験したことのない心の安らぎを……

……細胞の一つ一つにまで行き渡らせ……。

……この世のものとは思えない幸せを……

……ぞんぶんに味わい尽くすのだった……

……
……
……

「第6章 移住記念日」

「……パクパク……むぐつ!!
ん!んんっ……の、のひものっ……!!」

「ドン……はい!野菜ジュース。」

「ゴクゴク……!!ぷはぁ〜」

「あ、ありがとうお〜〜ふう…」

「時間どう?これも:大丈夫かな?」

謙江はサンドイッチを握りしめて、真剣な眼差しを仁へと向けた。

「えっと、いま7時20分だから……後40分。」

「うん、まだ大丈夫じゃない?」

「それと……はい。……コーヒーも入ったよ」

「ん!気がきく♪……ありがとうね。」

2021年5月27日、木曜日——

今日は、待ちに待ちに待った長野への引越し日だった。

ようやく訪れたその記念日に二人のボルテージは最高潮に達していた。

けれども、二人の腹ごなしが一段落したとき

……同時に物寂しさも覚えた。

「……はぁ……今日でこの家ともお別れかぁ……」

謙江は、今や段ボールに占拠された古民家を
懐かしそうに見回した。

隣にいた仁も一緒に目を細めた。

「随分、お世話になった気がするけど……」。

「たった2年なんだね……」

「え〜〜!!そんな短かったかな……?」

にわかには信じられず、指折り数えてみた謙江だったが……

「あ……ホントだ。……ちょうどピッタリ2年だ。」

「ふふっ…でしょ？しかも今月中の引っ越しなら、

この家の契約更新料がびた一文かからないんだよ…知ってた？」

「…あ！そっか。そういうえばそういう時期だったね…

そんなの私、すっかり忘れてたよ。

凄いタイミングだね…！」

「…そう。実は凄いタイミングだったんだよ…

大体、この家自体も

戸建てで、隣りと離れてて、値段もそこそこで…うん。

都内じゃココしか無かったよ…あの時は…。」

引っ越し毎に一番が与えられていたと、しみじみ振り返る二人だったが…
これから望む地は、それにも増して素敵な予感に溢れていた。

「よ〜よ〜し：！！今日の私は仕事の10倍張り切っちゃうよ：！！」

かつての大掃除で着たジャージに身を包み、謙江は息巻いて腕をまくった。

手綱を握る役を忘れることなく、仁は優しく謙江を諷めた。

「でも…遅くまで準備して疲れてるんだから、

あまり無茶はだめだよ？」

「うん！でも大丈夫！！

野菜ジュースで栄養取ったし、なによりも今：

美味しいサンドイッチでお腹いっぱいだから：！！」

「ふふっ…じゃ、頼りにしてるよ…！」

わずか数日前には、決して見られなかった元気な謙江の姿に：

…仁は嬉しさと感謝が心の底から溢れる思いだった。

引っ越し予定時刻まで、あと10分。

二人は簡単な最終確認をしていた。

「荷の運び出しが終わったら、謙江さんはこっちに残って

家の引き渡しの手続き——

「僕は新幹線で先に長野へ行って、運ばれた荷物の受け取り——
……………ここまで大丈夫そう？」

「大丈夫そう♪」

ねえねえ？不動産屋さんが来るのって…確か10時だよね？」

「ん？…そうだよ。それが終わったら、

ゆっくり長野に追い付いて来れば良いから……OK？」

「は……い♪OKっ！

……つと……ふう……」

「ん……大丈夫？」

「……あ、いや……」

今日は別行動多いけど……お互い頑張ろうね！」

「……うん。今朝、二人でちゃく……んとお祈りしたから

……きつと問題ないよ！」

「ふふっ……だね♪」

……………ブ□□□□……………！！

するとそのとき遠くの曲がり角から、それらしき大型車の音が聞こえてきた。

「あ……引越し屋さん来たかも！」

……ちよつと見てくるね。」

こうして楽しくも慌ただしい

『移住記念日』が始まったのだった——

……

——それから2時間して

荷物を2台の小型トラックにすべて運び入れたのを確認した仁は、
北陸新幹線に乗るため大宮駅へと向かった。

一方：謙江は家の引き渡しのため、一人で古民家に取り残されていたが、要件もほとんど拍子に終わったので…急いで仁の後を追って大宮駅へと向かった。すると――

巨大ティラミスとアイスコーヒーで景気づけを始めた仁と、大宮駅新幹線構内のベンチで上手く合流することが出来たのだった。

「あ…!! 仁君はっけっけっけ♪」

「…また、そのティラミス食べてるし!」

「…ん。あ：これ？何て言うか恒例行事？

…そう。恒例行事だからコレは。」

「へっけっけっけっけ♪。なるほどっけ

…あ、そういえば!

間に合ってよかったねっけっけ♪一緒に新幹線♪」

「ホントだね。

やっぱり(僕らの)歴史に残る旅立ちは、

一緒に良いって言ってるんだよ…きつと!」

「ふふっ…きつとそうだね♪

…じゃ、あと10分位だから…そろそろ行こっか?」

「うん。ちょうど食べ終わったとこだし、

元気もたっぷりチャージできたよ!!

「それは良かった♪

それじゃっけっけ♪元気に長野へしゅっけっけっけ♪」

「うん。いざ…!! 信濃の国へっけっけ!!」

「おっけっけ!!」

これまで幾度となく、二人が往復してきた北陸新幹線だったが……今度こそ本当に……最後の出発だった。

険しくそびえ立つ壁を乗り越え、
後は押せば開く『祝福の扉』を開けるばかり……
——そのドアを足並みをそろえて一緒に開けることで——
……………この先もずっと歩んでいける気がした

……………仁と謙江……………そして間に立つ『主』の力によって。

ホームに滑り込んで来た、美しい流線型を前に謙江は叫んだ。
「わぁ~~~~!!」

これ乗ったらもう長野なんだよね!!」
「……………ううっ……………こんなすぐ、また一緒に行けるなんて……………
ぐすっ……………感動だね……………」

「ふふっ……………今度はただの掃除じゃなくて、『い・じゅ・う』だからね?
こっち（東京）には戻らないよ?……………覚悟はいい!!」

「もちろんだよ……………!!」
「……………でも、そっか……………
この往復……………もうしなくていいんだね……………
……………なんか……………すごいね……………」

「ふ~~~~
……………ホントだよね……………」

……………言葉も無いとは正にこのことだった……………
——仁はこの瞬間、ここに居る事に——
またほっぺをつねりたい想いが込み上げて仕方が無かった。

ゆっくりとドアが開き、それは二人を招き入れた。

「じゃ……行こっか。」

「……………うん。」

今回、荷物の殆どはトラックだった。

二人は軽めのリュックを背に中へと歩を進めた。

こうして二人は、生まれてからこの方、

一度も離れた事のない都会を背にして——

……：辺境のログハウスへと旅立って行くのだった。

・
・
・

「……あ。だんだん建物が減っていくね……、

田舎っぽくなってきたよ……!!」

これまで幾たびか同じ景色を見てはいたが……

今日のそれは人生の半分が……

まとめて去っていくように感じられた。

やがてその景色も消え去った頃、仁は突如……小さく叫んだ。

「あ!!……そうか……やっと分かった……。」

「ん……どしたの？仁君。」

謙江は手にしたマシュマロの袋を開けずに、

隣で窓の外を見ていた仁を覗き込んだ。

「あ……うん……。……都会ってさ……

何でもあるのに肝心なものがないなあ……って思ってたさ。」

「……ん？……どういこと……？」

「…えっと…何て言うか…
…すごく便利なんだけど…
不足しているって言うのかな…『命』が…
…それが特に都会で顕著だな…って…。」

その言葉に、謙江は少しギョツとしたが…
…意図がまだ分からなかったので…
一先ず続きを聞く事にした。

「あの子…地球って本来、
人が生きていくのに最適なものなんだよ。
…でも人が知恵を絞って何か新しいことをする度に、
少しずつ地球は壊れていってる…。」

「うん。確かにそうかも…でも。」
人の良さを知っている謙江は、
少し意見を挟もうとした。

仁は少し頷いてから話を続けた。

「…もちろん、すべての人が悪いわけじゃない。
だって、『人』も、その『知恵』も…
『主』が与えてくれた素晴らしいものだからね。」

まだ要点を得ない謙江だったが、
もう少し続きを聞くことにした。

「…けれども人間がその素晴らしい『知恵』をどのように使うのか…
そこが徹底的に間違ってると思うんだ。」

謙江は質問を試みた。

「…それってつまり…
人の知恵を『主の為に使えば良い』…って事？」

消えた都会を遠くに見つめつつ、ゆっくり仁は答えた。
「いや…それも悪く無いけど…そうじゃないんだ。
……だって僕らがどんなに知恵を尽くしても…」

『主』は、それ以上が簡単にできるからね。
……その使い方は違うと思う……。」

煮え切らないやり取りに見切りをつけ、
謙江は単刀直入に聞いた。

「じゃあ：その『知恵』を……
どう使えば良いと仁君は思うの？」

「ん~~~~とね……」

……それは、ヒ・ミ・ツ♪」

仁は今日一番の可愛い仕草で、指を振った。

「え~~~~~~~~!!!!!!」

何でえ……!!!!!!」黙々」~~~~~!!!!!!」

……折角お話、最後までちゃんと聞いたのに~~~~」

「ふふっ……実はさっき、その答えが分かったんだけど……
それについて長野で試してみたい事があるんだ……!!」

「試す……?……って何を？」

不思議そうに謙江は首を傾げた。

「えっとね……それは……。」

仁は目を閉じ、何かを待って……

確信に満ちた表情で答えた。

「きつと、それ……僕だけじゃ無理だけど……
…………できると思う。」

……もしそれができたら……

多分、驚くことが起こるからさ……!!!
だから楽しみにしてね……ふふっ。
「いたずらっ子のように微笑んだかと思うと、
今度は遠く見えない長野の地を見つめた。」

「…いつかそれが何か、きっと分かる日が来るから……。」

このとき仁も、それが一体どういう結末になるか…

……実は教えられていなかったが……

やるべきことだけはハッキリとしていた。

「ふふっ…

じゃ………楽しみにしてよ♪」

謙江は、そのときの仁を見て納得したようで、

それ以上聞かなかった。

——その計画の後ろに『主』が居る事を感じたからだだった。

「はぁ〜〜……」

それじゃ長野でやる事、いっくっばいだね!!

引っ越しもまだ終わってないのに〜〜」

謙江は口を尖らせてお道化てみせた。

「ふふっ…大丈夫!!だって…

………ご馳走も同じくらい……

いっくっばいあるから………ね♪」

新幹線は二人を無事に目的地へと届け、

その後の引っ越しもつつがなく終わることができた。

こうして記念すべき移住の日は、

………これまでの困難がウソのように……

すべて順調に幕を閉じて行ったのだった——。

「エピソード 知り尽くされたおくりもの」

「ええええええええええつ……………!!!」

「こんな山奥に来て、車通勤ダメってなにそれくくく!!」

「…だから、つまり…」

「ウチの会社が、クレジットカードで車の保険を扱ってる関係で…
車通勤は原則禁止なんだって。」

社員は車の事故を起こさないように…って規則があつて

…だから殆どの社員は田舎でも電車通勤なのよ。」

「…でも、こっちは車社会だから…って前に言つてよね？」

確か：謙江さんが。」

「私だつて初耳だったのよ…!!」

昨日、こっちの職場に挨拶行ったら教えてもらったの！

…私の方が驚いちゃったわよ。」

「えくくくくそんなぁ…。」

長野で新しい生活を始めるにあたって、

——謙江の心のケアも完全ではない内に——

過大なストレスを与える要素はできる限り避けたかったのだが…

その最たるものである長距離の電車通勤を、

早くも余儀なくされてしまったようなのだ…。

「ちなみに…ここから歩いて駅って、どれくらいかかるの？」

…近くに駅なんて見たことないんだけど…。」

「一応、調べたんだけど…。」

滋野駅つてのが近くにあって…。」

「あ、ホントだ。こんな所に駅が…って、

歩いて1時間半!!無理だつて!!こんな所まで…」

「…って言うかコロナも広まってるのに、

そこまでして電車使わせるなんて酷くない!!」

「仁君、ちよつとちよつと!!最後まで話を聞いて…!!」

……でも許可が下りたの!!」

「え!!何の……?」

「だ〜か〜ら〜ら〜!!」

車で通勤することの……よ!!」

「!!?!?!え〜ら〜ら〜つ!!」

意味わかんないんだけど……言ってることがおかしくない!!」

「え〜と、つまりね……」

……長いから落ち着いて説明させてね……?」

つまりはこういう事らしい……。

確かに謙江さんの会社では、どんな片田舎であろうと原則は電車通勤だった。

……しかし、例外があったのだ。

自宅から駅までが徒歩1時間以上なら、
車通勤を許可する事がある……という例外が。

しかし、多くの人は生活の利便性ため駅から近い所に住むので、
そういうケースは極めて稀であった。

それは、長野の職場で自宅の場所を伝えたとき、

殆どの人に「何でそんな不便な所に?」

……という顔をされた事から推し量られる。

しかし、逆にそれくらい不便な所だからこそ、

原則を覆してまで『車通勤の許可がすぐに下りた』のだった。

(ちなみに長野でこの許可が降りた人は、本当に数えるほどしか居なかった。)

そのように地元の人ですら不便なログハウスの立地だったが……

……車で実際に通勤してみると……

なんと!!……片道、僅か25分だった。

(これは謙江の長い勤務歴の中でも……断トツに短い時間だ。)

しかも、ほぼ一本道。分岐は1，2回という簡単さ…
超が付くほどの『ペーパードライバー』謙江でも、
迷わず安全に辿り着けてしまうほどだった…。

そして繰り返すようだが…：

転勤する可能性のあるすべての店舗が、

このログハウスから車で通える圏内に存在した。

(正に付け入るスキが無いほど、先の先まで見越した立地だった。)

そして、驚くべきはこれだけでは無い…

他にもこのログハウスにまつわるグッドニュースが沢山あった。

例えば、ゴミの問題――

地方の移住トラブルで特に多いのがゴミ捨てに関する事だ。

地方の村でゴミ捨て場が私有地という場合がある。

すると顔見知りの住民以外は、ゴミ捨てを拒否されるケースがあるのだ。

…しかし、ここは別荘地。管理事務所が存在していた。

つまりゴミが自由に捨てられるのだ。しかも24時間いつでも。

これはむしろ都会より便利なほどだった。

もう一つは住環境――

別荘地といえど、建物の密集率には偏りがある。

しかし、このログハウスは周りにほとんど家が無かった…

つまりWIBOが飛んでこないのだ！これは仁にとって特に重要な点だ。

さらに、平坦地。岩盤で地震が起きにくい。

家の基礎が収納倉庫になる。光回線が通る…と、

辺境にしては群を抜いて良い条件がそろっていた。

しかし、二人を最も喜ばせたのは――

たとえ一から建て直しても、
きつと同じ家になりそうなほど可愛らしい
その赤くこじんまりとした外観だった。

それはまるで――

『我が子の好みを知り尽くした
内緒のサンタが忍ばせる
枕もとのプレゼントのように――』

その『赤いおくりもの』は

――まさに二人におあつらえ向きだったのだ。

・・・

「…つまり、結果として……」

このログハウスの立地が凄いつてことで良いよね？」

「そう。完全にそういう事…!!」

実際に住んでみてビックリだよ！私…」

「……………ふえくくく……………さすが『主』」

僕……………写真だけで選んだんだよ……………ここ」

「何度も聞いたわよ……………それ。」

……………でもホント凄いやね。改めてそう思った。」

「それに、最初の車をリースで手に入れた時も、
すごく分かり易かったわよね……………あれ。」

「そうだったね。一台だけ輝いてたもんね…。」

見た目も値段も色もバッチリで、カーナビまでタダで付いてたし…」

「…そうね。選ぶまでも無かったわね。」

車の知識ほとんどなくても迷わなかった位に…」

「だね。……完全に用意されてたよね、あのライトブルーの可愛い車。」

「…あ、そうそう！」

困みに、そろそろ二台目の車が必要なんだけど…。

……それについて、ちよっと相談があるの！」

「ん：相談？…どんなの？」

「…えっとね。うちのクレジットカードを長く使ってもらってる、

大口の得意客がいてね…。それが車の整備屋さんなのよ…

だから、そこで車を買いたいんだけど…いいかな？」

「いいんじゃない？そういう縁って地方だと特に大切だと思うし……

この流れだと、多分：」

「……たぶん？」

「うん。……多分、そこに……

ピッタリの車が一台だけ用意されてるから。」

「ふふっ…きつと、そうだね!!」

……じゃ、車の手配お願いしちゃうよ!!」

「うん！よろしくね：!!」

「……あ、でも一つ条件が、あるんだ：…」

このとき、仁が出した条件は一つ。

4WDであることだった。

長野の冬はひどく寒い：

雪道で路面が凍ってしまう事は冬の常識だった。

一台目の車は2WD。燃費は良いが雪道に弱い。

ならば二台目は冬季対策用に：という訳だ。

その要望だけを伝えてから、後日：その得意客の所へ行くことになった。

すると、何台か用意されていた4WDの中に……やっぱりあった。

一台だけ、形も値段も色も二人にピッタリのもの。
群を抜いて可愛いデザインのライトピンクの車だった。

後日、その二台の車は「青いやぎ」と「ピンクのウサギ(4WD)」と名付けられ……
二匹(台)とも家の庭で仲良く幸せに暮らしている……。

どちらも可愛らしく、赤いログハウスにピッタリの色であるだけでなく……
とても森の中で目立つ色のため、山道で事故に遭いにくいのだ。

(初めは事故らないように……目立つ『白』が良いと思っていただけ、
標高の高い山では逆に、雪や霧で見えなくなる事も多いと後に知った。)

これも(車の初心者のため)まったく計算してなかったのだが……
……今でも、これ以上ない組み合わせだと思っている。

それから一か月後——

「……ただいま……!! 食材いっぱい買って来たよ……!!」

「お帰りなさい! お疲れ様。運転、大丈夫だった……?」

「うん。……調子いいよ、あのピンクのウサギ……!」

ちよつとナビに癖があつて、変な所に案内されそうになっただけ……!」

「ええ!! 何それ……怖っ!!」

「……私、乗るときどうしよう。」

「とりあえず……謙江さんは青いやぎの方をを使えば問題ないよ。」

「……彼は山に詳しいから。」

「そっか……分かった。じゃ、とりあえず私はやぎに乗るね!」

「……あと、仁君。面白い事聞いたんだけど……聞く?」

その話を聞かないと食材をしまえなそうだったので、
仁はすぐにうなずいた。

「うん…何？」

「えっとね…職場の人から聞いたんだけど。

長野では野菜は買うんじゃない…貰うものなんだって!!

…すごくない!!地元の常識らしいよ!」

「え〜〜〜…今、いっぱい買ってきちゃったよ。

…野菜。」

「…って言うか無い無い!!都市伝説じゃないの?そんなの。

…まあ、都市ってより田舎だけだよ…ここは。」

「え〜〜〜?じゃあ…あれ、ただの冗談だったのかなあ…?」

「う〜〜〜ん。ま、でも『貰った』って言って良い位には…

…安かったね、野菜。」

「直売所で買ったズッキーニとか、1袋100円で…大きいのは4本も入ってたよ?
大きすぎて逆に規格外品なのかな…?

他にも、葉物、根菜、きのこ…と色々あったけど、大体100円だね。

儲ける気ないんじゃない?…って位のどんぶり勘定かも…。」

「でも逆に…なぜか手作りアンドーナツが1パック700円だったのが笑えたけど。」

「高っ!!なにそれ…!!なんでアンドーナツだけ?」

「分かんない。きつと値付けが都会とあべこべなんだよ…多分。

とにかく、色々と野菜買って来たからさ…まずは食べてみようよ!!」

ドサドサツ…!!それは大きなエコバック2袋と、

リュックに詰まった大量の野菜だった。

「…ええっ!!そんなに買ってきたの?

食べきれるかなあ……こんなに。」

「ん〜〜〜とりあえず。スティックサラダにすれば…簡単だし捗るからさ。

……まずは食べてみようよ…!!」

数分後――

テーブルの上には、色とりどりの野菜が
スティック状になって並べられていた。

「…じゃ、マヨと信州みそをつけて…と。
……………いただきます〜す!!!」

……………ガリツ……………

「えっ…!!」

このキュウリ……………キュウリの味がする!!」

「ええ??……………仁君、何言ってるの？」

……………キュウリなんだから当たり前でしょ？」

「いや、ホラ……………とにかく食べてみなよ!」

「うん……………分かったけど……………」

……………ガリツ!!

「あ……………」

「……………今まで食べてたのと全然違う……………!!!」

「……………野菜が、野菜の味する……………!!!!!!」

「あ……………!!!!!!」

【あとがき】

最後まで読んでいただきありがとうございます。
登場人物が自分であり、実際にあったことだったので
何とか最後まで書き上げる事ができました。

今回、この物語を書いた第一の目的が『自分の為の忘備録』だったので、
書かれている物語は99%位ノンフィクションです。
(残りは読みやすくする味付けetc)

これで、この出来事を一生忘れないだろうと思うと先ずは一安心。
本当に書いておいて良かったです。(なぜなら、最近物忘れがひどくて…)

では最後に、少しだけ物語の補足を。

今回、起こった一連の奇跡は：
……………実はただのオマケです。

どういう事かと言うと、本当に大切なことは、
いつも『心に平和がある』ことだからです。

僕や謙江さんが、人生でそれを初めて手に入れたのが、
いわゆる『主』とお会いたした時でした。

(「お金や努力で得られる安心」とは、

次元の違う『平和』です。あえて例えるなら――

『未来に何が起こっても、最後には必ず助けてもらえる最強の保険』
とでも言うのかな？ハッキリと言って、

未来が確実に保証できるのは『主』だけです…。)

そのとき以来ずっと…

……………良い時も……………悪い時も……………

————— 例え、どんな苦しい試練があろうと—————

片時もそれが離れて消えた事はありません。

そしてこの先も…

それが、決して消える事は無いことを僕らは知っています。

(ピンチの時、『主』が語ってくれたことばに、
数えきれないほど助けてもらったからです。)

話は変わりますが――

もし人間や生命が

『ただのタンパク質の気まぐれで造られた』
ので無いなら――必ず創造した方がいるはずですよ。

逆に、もし偶然できただけの命だとすると、
人間の生きる目的は――どこまでいっても自己満足になってしまいます。

しかし……………

ハッキリ言うと、僕もあなたもそんな軽い存在ではありません。

――その人が生まれて来た意味が目的が――
必ず存在するのです。

……………でも、それは……………

人間だけでいくら頭をひねった所で、
決して見つける事はできないのです……………

何故なら、『主』があなたを創った目的が…

実は、一人一人に存在しているからです。
だからこそ、あなたを創った方

――『主』に聞くのです。

その人その人の生まれて来た理由と意味は、

『主』が直接その人に語ってくれます。

(もちろん、もっと些細な事も教えてくれますが。)

その言葉のやりとりの助けとなるのが

『神のことば』である聖書です。

『聖書』は、実に魔法の書であり
読む人、読む時期によって答えが千差万別に変化します。

僕も何度読んだか分かりませんが：

「あれ？前と文章変わってない：？」と思うほどに、
読んだ時に得るものが時ごとに変化します。

別に文字が変わるわけでは無いのですが：

——『主』が直接、その人の心に働きかけるので——
読み取った意味が時に応じて変わってくるのです。

そして驚くべきことに

その時、もともと心に響いた言葉は：

——未来において、およそ実現する——
そんな事を何度も何度も体験しました。

……………そう、この物語の主人公のように。

もし他の多くの書物のように——

誰が読んでも変わらない、一度読んだら飽きるような書物だと思っていたら：
……………恐らく、あなたの人生の最も大きな損失になるでしょう。

でも、もし読みたくなったら自由に読んでみてください。

(できれば、お小遣いで買うと良いです。とても大切にするはずです。(笑))

それと最後に一つだけ。

それは読むときに、

『祈り』ながら読む事です。

(『祈り』が本質であり頭で文字を読むのではないからです。)

『祈り』を続けると、

ある時、『主』からの語りかけが必ずあります。
それを期待してみてください。

少し分かり難いかも知れませんが…
ここから先は体験の世界。

たぶん最初はにっちもさっちもいかないので、
誰か聖書に詳しい人に聞くと良いでしょう。

いつかあなたも『主』にお会いできることを期待して
……………僕は祈っています。

そしていつか、もし諦めずに
あなたも『祈る』ことができるようになったら…

——そのときはきつと——
ゆるぎない『心の平和』の方から、
あなたをその両の手に掴んで、抱きしめて放さない事でしょう。

路凍る小諸にて
なぜか小春の暖かさに包まれる
赤いログハウスより——

2021年12月某日

篠原 仁

謙江